くりあんさ ブラジル通信 79

平成25年6月発行

ランタン作りワークショップ ―手作りランタンに灯をともして―
神奈川県厚木市・ブラジル人学校エスコーラ・アクアレラにて （p6,7 に関連記事）
photo: Mauricio Sato（p6,7 に紹介文）

多様化する教育を考える

従来の公立学校の範囲ではカバーしきれていない様々な背景や特別なニーズを持つ子どもたちに個々に合った多様な学びを保障するため、外国人学校、シュタイナー学校、障がい児教育、多文化教育など、様々な試みが行われています。現在オルタナティブ教育の現場ではどんな動きがあり、私たちには何が出来るのでしょうか？

小貫大輔の記事では、多様な学びを保障する為、教育を〝受ける〟だけでなく、自身でどんな教育を〝選ぶ〟のかという事も権利に含め、その実現を求めて戦う人々や団体の姿と、それに対する政治の姿勢を紹介しています。次の宮ヶ迫ナンシー理沙の記事では、彼女の修士論文をもとに、新たな概念として広まりつつある〝インクルーシブ教育〟を紹介しています。

1 表紙
2-5 特集記事「オルタナティブ教育」
2-3 オルタナティブ学校やブラジル学校をめぐる政治状況： 小貫大輔
4-5 インクルーシブ教育と多文化教育： 宮ヶ迫ナンシー理沙
6-7 CRI 活動報告「あちん奮闘記」： 大嶋敦志
8-9 ブラジルと日本の小学校架け橋プロジェクト： 川原翼
10 2013 年 CRI 総会報告： 福井俊紀
11 2013 年度運営委員の紹介
12-13 2012 年 収支決算・事業報告 / 2013 年 収支予算・活動計画
14-15 ブラジル スタディツアーレポート： 宇都野真利夫
ブラジル海外実習を終えて ～ Viva! Brasil! ～： 大塚紀巴
16-17 エリゼッチさんのお話を聞く＆岩本季和さんの帰国報告会： 宮ヶ迫ナンシー理沙
18-19 連載第２回 イギリスシュタイナー幼稚園へたどり着いて： 稲谷千妃呂
20 グアテマラ便り： 西原里依
21 世界は緊急事態！じわじわ効いてるボランティア経験： 蓑田竜史
22 ウテ・クレーマー（Ute Craemer）、75 歳の誕生日を祝う日に。
23 読者感想： 星重光 / 東海大学国際学科の 2013 年度「愛と性を学ぶ」シリーズへのお誘い
24 お知らせ

発行 CRI - チルドレンズ・リソース・インターナショナル
代表 宮ヶ迫ナンシー理沙 編集 安藤将 大嶋敦志 坂井春菜 西原里依 橋口博幸 福井俊紀

住所 259-1292 神奈川県平塚市北金目 4-1-1 東海大学国際学科気付
Fax. 0463 - 50 - 2407 東海大学国際学科小貫大輔研究室
E-mail. criinfo@cribrasil.org

CRI - Children's Resources International = 子どもたちのための国際的資源
くりあんさ - ポルトガル語で「子ども」、スペイン語で「子育て」の意。

オルタナティブ学校やブラジル学校をめぐる政治状況

小貫大輔

昨年の末に生まれた第二次安倍内閣で文科大臣をつとめる下村博文氏。実は安倍総理が官房長官だった小泉政権当時、シュタイナー学校やフリースクールのネットワークと力をあわせて「教育特区制度」によるオルタナティブ学校の「私立学校化」を文科省に認めさせた国会議員でした。たいへん保守的な信条を持つ人で、一見「オルタナティブ教育」の関係者とは人種が異なるようでもありましたが、当時の小泉・ブッシュ両政権の「新保守主義・新自由主義」の文脈では、（彼的には）何ら矛盾のない共同戦線だったのだと思います。つまり、「教育を自由化して、自己責任で斬新な取り組みをする学校を増やす」ことは、一面から見れば少数者の権利保障につながる施策ですが、他の面から見れば一種「競争原理」の導入につながる発想でもあるからです。

シュタイナー学校の側から下村さんを発見したのは、二〇〇一年〜二〇〇三年当時、三鷹のシュタイナー・シューレに子どもを通わせていた私でした。奇縁と言えば奇縁ですが、民主党・野田政権で官房長官を務めた藤村修氏（当時は衆議院議員）に、シュタイナー学校の「私立学校化」について相談にいった際に紹介されたのでした。藤村さんは政治に入る前に日本ブラジル交流協会の事務局長をしていたことから、何かとよく相談にのっていただいていたのでした。藤村・下村というお二人は、交通遺児育英会の元職員・元奨学生の関係で、現あしなが育英会でも元副会長同士という縁です。

下村さんは、自らが早稲田大学在学時代に学習塾を経営していたこともあって、教育改革に長年闘志を燃やしてきた人です。初めてお会いした当時は、株式会社が学校を開けるようにと文科省にがんがんプレッシャーをかけていたところでした。「学校の安定的運営の確保」を理由に文科省は強く抵抗していましたが、小泉政権の規制緩和の波にあおられて今にもひっくり返りそうでした。「ちょっと待ってください。株式会社立学校がＯＫなら、シュタイナー学校のように長年安定して学校を続けてきたＮＰＯ立の学校だって認めてくださいよ」という私たちの言葉に、下村さんは「ぴくっ」と反応したのをおぼえています。

「いまどきの先進国で、たった一つの種類の教育しか認めていないところなんてないじゃないですか。日本の状況は、むしろ中華人民共和国や朝鮮民主主義人民共和国と同じですよ。国民は、政府が作った学校に子どもを通わせなければいけない。私立学校だって、政府の決めた教育をしているだけで何も変わらない。他に選択肢のない中で、先生や学校に対して文句も言えないのが実情です。子どもを人質に取られたようなものだと言う言い方もあるほどじゃないですか」

議員会館の事務所に案内されて力説する私に、下村さんは「あなたの子どもは拉致されている、だね」とポンと膝をうち、さして間を置くこともなく三鷹のシュタイナー学校に見学に来て、一気に共同戦線が生まれたのでした。教育分野の規制緩和政策がまとまる前夜に、文科省ほか、内閣府、経産省の担当者と談判するようなシンポジウムを続けざまに開きました。議員会館の百五十人入る会議室に三百人ほどのオルタナティブ学校関係者がつめかけ、官庁のお役人がまさに「たじたじ」と机を引いて、人が床に座れるスペースを広げたのを懐かしく思い出します。ほどなく、株式会社立の学校もＮＰＯ立の学校も「教育特区」の枠組みの中で認められることになりました。

当時下村さんと共闘したオルタナティブ学校のうち四校（現在の藤野シュタイナー学園、北海道シュタイナー学園、聾バイリンガルの明晴学園、フリースクールの東京シューレ）が、その後数年をかけて「私立学校化」を果たしました。注目すべきことは、文科省はそれらの学校に直接アプローチして、「ＮＰＯ立学校」となることを思いとどまらせ、学校法人として認可し、普通の私立学校となる道を開いたことです。（権力からの「取り込み」と言えばそのとおりです。）株式会社立学校となった五十数校の大部分は学校法人とは区別されていて、「私学助成」が受けられていないのと対照的です。

さて、あれから十年がたち、私は今、ブラジル学校の支援に打ち込んでいます。教育は「受ける権利」が保障されるだけではだめで、「選ぶ権利」が伴って初めて「教育への権利」が保障されたことになります。国際法で明記された（少なくとも先進国間では常識とされる）基本的人権の一つです。その点、シュタイナー学校を選ぶ人も、ブラジル学校を選ぶ人も、卒業資格が得られなかったり、私学助成が受けられなかったり、通学定期が買えなかったりする点では同じで、まさに「選ぶ権利」が侵害されている状態にあります。しかし、ブラジル人（外国人）の子どもたちの状況は特に深刻で、日本では日本国籍のない子どもに対してそもそも「教育を受ける権利」が保障されていません。つまり、義務教育もなく、外国学校には正規の学校となる道も閉ざされたままなのが実情です。その結果、ブラジル国籍の子どもの多くが（数千人と言われます）どんな学校にも行かないまま放置されていて、全国で五千人ほどの子どもが通うブラジル学校のほとんど（五十校弱）が私塾の形態で運営されていて、残り（十五校ほど）もようやく各種学校扱いされるようになったばかりです。

最近、フリースクールの東京シューレに誘われて「多様な学び保障法」を実現する会というのに関わっています。いろいろなオルタナティブ学校が集まって作る会で、それぞれの学校が学習指導要領や学校設置基準などの規定にとらわれない教育に取り組むことを法的に認めさせようという運動です。その中で、私はブラジル学校の利害を代弁する立場にいます。フリースクールのネットワークは不登校児童生徒の受け皿となっていて、全国にメンバーの数も多く、政治家たちからも党派を超えて支援を受けています。今回の動きには、そういった一部政治家からの支援やアドバイスも得ていると聞いています。この運動のおもしろいところは、国民的問題とも言える「不登校問題」を盾に、そもそもの基本的人権である「教育への権利」を大上段に構えて、政府・政治家との調整もしながら、結果として実践家の側に実利のある「落としどころ」を模索している点だと思います。

外国人の権利侵害は、とかく政治家の関心とならないものです。日本では朝鮮学校と政府との対立の歴史もあり、外国学校に公的助成を与えるという案はなかなか政治のアジェンダにのりません。そんな中、「不登校」という全国的な問題への取り組みと手を結ぶことで、「ブラジル学校」という特殊な教育実践への理解がえられるかもしれない……、その可能性は魅力的です。政治状況はまだまだ保守的で、新政権下でいったん動きが止まっているのは事実です。下村文科大臣は、入閣最初の閣議で「高校無償化は朝鮮学校には認めない」という発言をして朝鮮学校への対決姿勢を明確にもしています。「多様な学び保障法」の前途は多難ですが、先進国の常識に照らし合わせて、いつかは実現する運動だと思っています。しばらくは腰をすえてかかわっていきたいと思います。

「多様な学び保障法を実現する会」主催のイベント

第３回総会＆発足１周年記念イベント

「新しい法律が子どもたちの未来を支える」

日時：　7 月 14 日（日）13:30 ～ 16:30

場所：　早稲田大学戸山キャンパス 33 号館 3 階 第 1 会議室

参加費：500 円

詳しくは多様な学び保障法を実現する会の HP をご覧ください。

http://aejapan.org/wp/

会の詳細が記載されたリーフレットは以下 URL より閲覧可能です。

http://aejapan.org/wp/wp-content/uploads/leafletweb.pdf

インクルーシブ教育と多文化教育

宮ヶ迫ナンシー理沙

途中の一年間の休学を含め、三年かけてこの春に大学院の修士課程を修了することができました。日本に生きる外国につながる子どもの教育が私のメインテーマですが、障害児教育を含めたより広い「マイノリティ教育」のことを勉強するなかで、「特別ニーズ教育」「インクルーシブ教育」という概念に出会いました。これまで、「外国につながる子どもの教育」「多文化教育」の分野において、障害児教育を含む特別支援に関して異なる領域のものとして関連性にあまりふれられてきていないのですが、これらが有用な考え方であると思いました。

■インクルーシブ教育とは

インクルーシブ教育の概念は、障害児教育に関連し一九九〇年代前後の欧米諸国を中心にひろがりはじめていたのですが、一九九四年ユネスコとスペイン政府の主催でひらかれ、「万人のための教育」を目的とした国際会議で採択された、特別ニーズ教育が唱えられたサラマンカ宣言によってその市民権を得たと言われています。サラマンカ宣言におけるインクルージョン（包摂）の五つの原則は以下の通りです。

一．どのような子どもであれ、教育を受ける基本的な権利を持ち、満足のいく教育水準を達成・維持する機会が与えられるべきである。

二．すべての子どもは、他の人にはない、特徴、関心、能力と学習ニーズを持っている。

三．そのような個々の特徴やニーズを考慮して、教育システムを構築し、教育実践を行うべきである。

四．通常の学校は特別な教育的ニーズを持つ子どもたちに対して開かれていなくてはならず、個々のニーズに対応できるように子どもを中心にした教育の実践や配慮がなされるべきである。

五．インクルージョンの理念を持った学校は、差別的態度と戦い、すべての人を喜んで受け入れる地域社会を築き上げ、万人のための学校を達成する。さらに大多数の子どもたちに効果的な教育を提供し、究極的には費用対効果を高めるものとなる。

特徴的なのは、「すべての子どもは等しく異なっている」という前提と、通常の学校はそれぞれのニーズに対応のできる体制をつくるべきと、通常教育の在り方を明示している点です。

「特別な教育的ニーズ」の出発点は、障害児教育に関する議論にありました。一九七八年のイギリスでメアリー・ウォーノックを議長とする障害児の教育調査委員会の報告書『特別ニーズ教育（通称：ウオーノック・レポート）』において、従来の障害の枠組みを超えて「特別な教育的ニーズ（Special Educational Needs = SEN）」という包括的な概念が提起されたことで、障害の有無に限らず「すべての子どもたち」を対象とし、教育を受ける上でのニーズに着目したことにはじまっています。つまり、その対象となるのは、障害のある子どもに限らず、不登校児や外国から来た子ども、少数民族の子どもなど、学習上さまざまな困難を抱えるであろう子どもたちをも含むということです。障害の有無によってカテゴリーに分別するのではなく、すべての子どもたちは等しく異なっていることを前提とした考え方です。サラマンカ宣言では、特別ニーズ教育の指導原理としてインクルーシブ教育の理念が打ち出され、それ以前の統合教育（インテグレーション）に代わってインクルーシブ（包摂）教育がこの分野における主要な議論のテーマとなっていきます。

『ウオーノック・レポート』において、「教育的ニーズ」という概念が導入された背景には「何がその子どもの欠陥かではなく、その子どもの前進のためになにが必要か」という問いがあります。「学校や親やその他の人々に対して、障害があるからなんらかの支援が必要であるということに注意を向けさせるのではなく、どのような支援があれば子どもの学習が可能になるのかという立場」をとり、「以前よりも肯定的なアプローチ方法を導入すること」を目指していたのだといいます。

■日本の障害児教育における議論

日本では、戦後より主に知的障害の子ども（精神薄弱児）の議論において、分離教育が説かれてきました。「人がその行動領域を広げ、経験を積み重ねて、その生活に目標を持ち、目標達成のために努力するようになるためには、彼が拠って立つ社会的地盤というものを必要とする。ある人間が学習するという活動も決して個人的なものでなく、その背後にある社会という地盤がなければならないのであり、そして精神薄弱児にとっては、まず特殊学級が社会的地盤となると考えるのである。」という考え方のもと、同じような障害をもった子どもたちで構成された集団（その子どもが拠って立つ社会）が必要だと言われていました。しかし最近では、「〜のために」という専門家の見立てが絶対化されてしまい、本人の主張が尊重されない危険性があるということと、「共生・共育」は理想でありつつも現実であるという主張が目立つようになってきました。つまり、この社会全体は多様な人たちから成っているのであり、さまざまな困難があるけれども、その現実を生きる必要があるということだと思います。

■インテグレーションからインクルージョンへの発展

「共生」が目指されるようになった「インテグレーション（統合）」の発想は、一九五〇年代デンマークにおいて、社会省の行政官だったバンク・ミケルセンが、知的障害者を人里離れた大規模な施設に隔離して権利を制限することの不当性を訴えたことにはじまりました。（知的障害者の）親の会と共同で、障害者に地域での通常の市民と同じ生活を保障することを目指した、ノーマライゼーションの理念に基づいた社会福祉の考え方が、北欧でひろまっていき、そのノーマライゼーションの理念が教育へ適用されたことで「インテグレーション（統合）」という考え方に発展したと言われます。「統合はノーマライゼーションを実現するための手段と考えられ」「障害者が特別な施設や学校に入れられることによってノーマルな生活条件を奪われてきた状態を克服し、通常の生活を確立するためには、障害者を地域社会や学校にインテグレートすることが必要だと考えられました。その流れにおいて国際的には、国連の「障害者の権利宣言」（一九七五年）、「子どもの権利条約」（一九八九年）、アメリカの「全障害者教育法」（一九七五年）、イギリスの『ウオーノック・レポート』に見られるように通常教育環境へのアクセスを保障しようとする考え方が徐々に主流となってきています。

しかし、もともと「通常学級内でのケア・サービスの連続体を通じた多様な施策が意図されていた」のが、徐々に「通常学校か特殊学校か」の二者択一の議論が多くなり、さらに、「障害児だけを対象に既存の通常教育のシステムに統合を図ることの限界」が見えてくるようになったといいます。初期の「インテグレーション」とその発展系と言われる「インクルージョン」の違いを、若干恣意的にではありますが、説明すると、「インテグレーションは学校を同化のプロセスに巻き込み、そこでは、（特別な教育的ニーズを持つか、あるいは異なった文化的・言語的背景を持つ）彼らが適合できるように変化する責任が、同化する個人に置かれている」のに対して、「インクルージョンは、学校を便宜・調整のプロセスに巻き込み、そこでは、学校がより敏感になるように、カリキュラム、教授法、教材、手続きを変え、適合させる責任が、学校に置かれている」という定義がされています。

インクルージョンの理念は、「教育全体の改革を視野に入れ」、「学校それ自身を再構築する」または「学校環境を創造すること」を含む「不断の改革の『プロセス』として捉えられるのです。教育方法学の研究者である稲垣忠彦氏は、「障害を持つ子どもを普通教育で受け止めようとする制度改革の構想にとって重要なことは、障害児のために条件整備をしようということではないのである。（中略）そうではなくて、障害児が入ってくることを契機として普通教育の欠陥を正し、すべての子どもが生き生きと生活できるように、また、実質的な援助を得ることができるように普通教育を改革していくことこそ課題なのである」とし、限定的な対象とした障害児教育が、インテグレーション（統合教育）、インクルージョン教育の議論を経て、学校改革の必要性を見いだしていました。障害児を通常教育で迎えるにあたって、単なる条件整備ではなく、それを契機に、すべての子どもが生き生きと生活できるような学校改革を求めているのです。

サラマンカ宣言は、それまで限定的だった「特殊教育」の転換を図ったことにおいて画期的でした。『特別ニーズ教育（Special Needs Education）』とは、『特別な教育的ニーズ』に対する教育的施策であり、特別な場に限定せず多様・重層的にケア・サービスを保障し、その対象を障害児以外にも積極的に拡大させるものである。」「サラマンカ宣言はそれを、教育全般の改革を志向するインクルーシブ教育の一環として位置づけた」ということです。

日本では、従来、限定的だった障害児について、「特殊教育」という語を使用していました。しかし、最近聞かれるようになった「学習障害」「高機能自閉症」などグレーゾーンとも言われるタイプの子どもたちの増加に伴い、さらには世界的なインクルージョン教育の議論にも影響されてか、二〇〇三年に「今後の特別支援教育のあり方」という研究報告が発表され、「特別支援教育」と名称が変わり、その方向性も変わりました。そのなかでは、小・中学校においては、障害児学級を廃止し、通常学級に学籍を一元化することが提起され、インクルージョン教育への一歩前進か、という評価もありました。（しかしながら、現在でも条件整備が行われていないことから、通常教育に統合し人手をかけずに変えようとする、背後に新自由主義の考え方があるのではとの批判的な見方があります。）

外国につながる子どもたちの教育に関して言えば、「インテグレーション（統合）」の考え方が、外国人生徒を受け入れる日本の学校現場の主流の考え方のようです。複数の学者によって、〝日本人と同様に扱う〟という配慮は子どもたちの固有の文化や言語、慣習などを無視している「奪文化化」である、または「一斉共同体主義」などと批判されてきました。その根拠となっているのは、一九六五年通達と呼ばれる、在日コリアンの教育施策について出された基本方針です。現在、広く外国籍の子どもについて当てはめられており、基本方針は当時のままです。

外国人については就学義務が課せられていませんが、その保護する子を公立の義務教育諸学校に就学させることを希望する場合には、これらの者を受け入れることとしており、受け入れた後の取扱いについては、授業料不徴収、教科書の無償給与など、日本人児童生徒と同様に取り扱うことになっています。このような外国人児童生徒の我が国の学校への受入れに当たっては、日本語指導や生活面・学習面での指導について特段の配慮が必要です。（文部科学省 帰国・外国人児童生徒教育等に関する施策概要）

曖昧にするような「特段の配慮」という語がありますが、「同様に取り扱うこと」という方針を示した箇所が非常に重要で、異なる文化的バックグランドをもつことは顧みられず、他の大勢の子どもたちは同じように扱われるのがその基本姿勢となっています。

この点において、障害児教育を出発点とし、論じられ発展してきたインクルーシブ教育の基本の考え方には、外国につながる子どもたちの教育にも言えることがいろいろとあるのです。残念ながら、日本では「障害児教育」「外国につながる子どもの教育」分野を超えた議論があまり進んでいません。その手掛かりを探っています。紙面の都合上、深くは触れられませんが、実は神奈川県は、こうしたインクルーシブ教育の考え方を取り入れ、国の定める「特別支援教育」の路線とは一線を画した、独自の支援教育理念をもっています。現場まであまり浸透していないのが実感ですが、そういった言語化された理念が存在するので、それらをもっとアピールしていくべきだと思っています。

「すべての子どもが等しく異なる」「すべての子どもが特別である」という視点。

多様な子どもたちの教育の場として、公教育とは異なるオルタナティブ教育の運動がありますが、それらの議論と同時に、公教育での現場の認識や実践が変化していくための議論もすすんでいくことを願っています。

荒川智（2004）「『特別支援教育』の歴史的文脈とインクルージョン」日本特別ニーズ教育学会（SNE学会）編（2004）『特別支援教育の争点』文理閣，pp.159-182

――（2005）「特別ニーズ教育の比較教育的考察」『障害者問題研究』第33号，pp106-115 ――（2006）「多文化教育の展開とインクルージョン：特別ニーズ教育との接点」『茨城大学教育学部紀要』第55号，pp219-233.

――（2008）『インクルーシブ教育入門：すべての子どもの学習参加を保障する学校・地域づくり』クリエイツかもがわ

Warnock,M./Norwich,B.（宮内他訳）（2012=2010）『イギリス特別なニーズ教育の新たな視点：2005年ウォーノック論文とその後の反響』ジアース教育新社

倉石一郎（2012）「包摂／排除論からよみとく日本のマイノリティ教育」稲垣恭子編著『教育における包摂と排除：もうひとつの若者論』明石書店

真城知己（2003）『図説 特別な教育的ニーズ論：その基礎と応用』文理閣

篠原睦治（2011）「『共生・共育』のなかで『教育機会の平等』を考える」宮寺晃夫編『再検討教育機会の平等』岩波書店

志水宏吉（2010）『学校にできること：一人称の教育社会学』角川学芸出版

鈴木文治（2006）『インクルージョンをめざす教育：学校と社会の変革を見すえて』明石書店

あちん奮闘記

ランタンウォーク　厚木市エスコーラ・アクアレラにて

大嶋敦志

二〇一二年十一月茨城オプソン生徒主催の異文化交流キャンプ（詳細は通信七十八号参照）の余韻さめやらぬまま、今度は厚木市にあるブラジル学校エスコーラ・アクアレラ（以下、アクアレア）でのランタンウォークの準備です。アメリカから東海大学のプロジェクトで来ていた香村真理子さんと協力して、当日のルートを決め、材料を揃え、タイムテーブルを組みます。アクアレラのジュリア先生が、是非ランタンウォークの後にバーベキューをして交流の場を持ちたい、というので、ランタン作り、ランタンウォーク、バーベキューの三部構成にしました。

当日、予想していた通り、ブラジル人の保護者はゆっくり集まってきます。みんなやってきてはそれぞれにキスをしたりハグをしたりしながら園内に入ってきます。参加者はアクアレラの生徒とその家族、ベイジョ・ミ・リーガ（東海大の活動団体）、その他を合わせて約三十人。みんなに教室に集まってもらい、僕のたどたどしいポルトガル語でイベントの趣旨を話し、香村さんが流暢なポルトガル語でランタンのつくり方を説明しました。イベントの趣旨は「親子の時間を過ごす」ことと「国を越えた友だち作り」です。

それぞれ中央に置かれた工具や材料を受け取り、ランタン作りがスタートしました。子どもたちは真剣なまなざしで配られた厚紙に絵を描きます。大人たちもそれを見守りながら自分の厚紙に絵を描きます。絵が描けたら数枚重ねた新聞紙の上にそれを置いて、絵に沿って父兄がナイフを入れます。そうしてくり抜いた穴に色の着いた薄紙を貼付けて窓をつくります。定規で寸法を測り、正確に折り目線を引いて組み立てます。

ロウソク立てはペットボトルキャップを凹に置いて中にロウを垂らしてつくりました。ところが、キャップもオイルで出来ているせいか、ロウがうまくくっつきません。歩いている途中でロウソクが倒れたら危険です。どうしたものかと考えていると、ジュリア先生が熱ボンドをもってきて、キャップとロウソクをくっつけてくれました。さらに、これだけでは心もとないと、アクアレラに子どもを通わせているお母さんがキッチンからアルミホイルを取り出して、キャップの底からロウソクの真ん中くらいをグルグル巻きにして補強してくれました。これで万全、彼らの「なんとかする力」には毎回脱帽です。

ランタンが次々に仕上がってきました。さっそく火をつけたいところですが、我慢してもらいます。みんなの作品が出そろってから点灯します。全ての作品が出そろったのはランタンづくり開始から二時間くらい経ってからでした。みんなのランタンを教室の中央に丸く並べて火をつけていきます。全てに火が灯ったことを確認すると、イチ、ニのサンで電気を消します。Wah!Que lindoooo!（すごいきれい）歓声があがります。子どもは色紙の窓の奥で揺れるあたたかな光が嬉しくて、近づいてランタンの上から覗き込んでいます。いつもなら危ないと止めるところですが、これだけ大人がいれば、子どもの好奇心を少しは見守ってあげることが出来ます。

しばらく静かにランタンの光を見つめたあとで、ランタンウォークでうたう歌の練習をしました。保護者はポルトガル語の歌だと元気になって、英語と日本語の歌だと元気がなくなります。おもしろいくらいはっきりしています。それぞれの歌を数回ずつ練習して、みんな声が出てくるようになったところで、この機を逃すまいとみんなに呼びかけて外にでました。

そこにタイミングよく自治会のおじさんがやってきました。お友達も一緒でした。これから出かけるので顔を見に立ち寄った、とのこと。おじさんは最初、ランタンウォークには参加できないと言っていましたが、次々に現れるランタンの光に心を動かされたらしく、お出かけを先延ばしにして参加してくれることになりました。地域の方に参加してもらえる以上の成果はありません。

ランタンの一行は稲田のある地域に向かって長い坂を下ります。僕は先頭でギターを弾きながらうたいます。百メートルうしろまでランタンの光が見えます。坂を下ると県道に沿った狭い歩道を歩きます。車が前から後ろからやってきます。何台もの車が僕たちの列の前で一度速度を落としているのが分かります。でも速度を落とした車も、後ろの車に追いつかれて、口惜しそうにまた速度を上げて通り過ぎていきます。県道から小道に入り少し進むと稲田が広がります。すでに十一月なので収穫を終えていますが、来期に備えてか、あおく細長い若い稲が行儀よく並んでいるのがうっすら見えます。

この風景には＊カエタノ・ベローゾの「Canto de um Povo de um Lugar（あるところのある人々のうた）」がよく合うので、この歌を何べんもうたいました。

Todo dia o sol levanta e a gente canta ao sol de todo dia
Fim da tarde a terra cora e a gente chora porque fim da tarde.
Quando noite a lua mansa e a gente dança venerando a noite.
Madrugada, céu de estrelas e a gente dorme sonhando com elas.

（意訳）
毎日陽は昇る　私たちは陽に歌を捧げる
夕暮れに色づく大地　私たちは夕暮れに涙を流す
夜になると　私たちは静かな月を讃えて踊る
明け方　星でいっぱいの空　私たちは眠り　星の夢を見る

かれこれ一時間ほど歩いてアクアレラに戻ってきました。ジュリア先生と数人の保護者がブラジル・バーベキューを用意してくれていました。誰が持ってきたのか、カシャーサ（サトウキビのお酒）まであります。正直、僕はこれに目がありません。これを見ると、モンチアズールにいたときに、カシャーサと潰したレモンと砂糖をバケツにドバドバッと入れて、みんなでまわし飲みしたのを思い出します。そんな思い出と、この日のピースフルな雰囲気があいまって、カシャーサを見るなり反射的にコップに手を伸ばし、学生と子どもたちの視界から離れて、こっそりコップを傾けました。いや～、うまい。そして、なつかしい。

辺りを見回すと、ここそこで参加者同士のコミュニケーションがうまれています。あまり顔を合わせることのなかった保護者同士が、また、ベイジョの学生とアクアレラ保護者が楽しそうに話しています。子どもたちは走り回って、夜遅くまで友だちと遊べる開放感を満喫しています。

さて、イベントを閉める時間になりました。最後が一番大切です。帰ろうと席を立つ保護者をなんとか引き止め、みんなで手をつなぎ一つの輪になります。みんなが静かになったのを見計らって、僕と香村さんとジュリア先生がそれぞれ簡単に今日を振り返りました。

ジュリア先生は本当に嬉しそうな顔をしていました。彼女は日々激務をこなしてアクアレラを切り盛りしています。命を削っているようにも見えます。そんな彼女がイベントの終わりに幸せそうに微笑むのを見ると嬉しくなります。

輪になったままみんなでもう一度、畑で何べんもうたった歌をうたいました。このメロディ、すっと心に溶けていくようです。カエタノ・ベローゾが見た景色に不思議な浸透圧で引き込まれていくようです。歌が終わるとみんな静かに余韻に浸りました。誰もその余韻から醒めないように深く息を吸って、オブリガード（ありがとう）。

＊カエタノ・ベローゾ：ブラジルの作曲家であり歌手。時を越えて愛される多くの曲をもつ。現在も現役で活動中。

photo: Mauricio Sato

佐藤マウリシオ（33 才）　カメラマン

日系ブラジル人。20 歳のときに来日。
プレスラーのようなムキムキの体に絡み付く竜の入れ墨。
こわい人かと思いきや、虫も殺さないスウィートハート。
マルチカルチャーキャンプをはじめとする、
「CRI」や「ベイジョ・ミ・リーガ」の活動でいつも写真を撮ってくれる。
過去に「くりあんさブラジル通信」で使用した彼の作品も少なくない。
今後の目標は「ビジネスでも通用するレベルの日本語を習得すること」

ブラジルと日本の小学校架け橋プロジェクト

川原翼

三月十九日、ブラジルのモンチアズールで一年間過ごした後、日本の公立小学校の教員になり、五年目の春、僕は二回目の卒業生を送り出しました。彼らとは五年生・六年生と二年間を共に過ごし、苦楽を共にしてきました。学級経営や教材研究に追われ、忙殺される日々の中、モンチアズールで過ごした日々がどんどん風化していく僕の脳裏に時々聞こえてきたのは、ブラジルから日本に帰国する寸前にウテ・クレーマーさんに言われた言葉でした。「あなたたちボランティアは、ここモンチアズールで植えた自分の種を、自分の国に戻って、いつか花を咲かせないといけないのよ。」忙しさの中にも、ふとした瞬間、ウテさんの言葉は力強く、胸の中で何度も甦りました。

話は少し遡り、昨年度の五年生の時、総合的な学習の時間でミュージカルに取り組んでいたので、表現力の参考になればと、大嶋敦志さんに彼が得意とするボディーパーカッションを教えにクラスに来てもらいました。その時に、せっかくだからということで、大嶋さんと二人でブラジルについて子どもたちに熱く語り、子どもたちも少なからずブラジルという国に興味をもち始めていました。でも、彼らにとっては、ブラジル人は珍しくはありません。市内には在日ブラジル人が数多く住み、学校内にもブラジル人児童は各学年にニ～三人は必ずいるような環境です。しかし、ブラジル人児童は日本人児童に溶け込み、日常で彼らからブラジルを感じることはほとんどありません。

そこで、六年生になってから、同じく総合的な学習の時間で、ＣＲＩが関わっている茨城のブラジル学校「オプソン」と交流しようと持ちかけました。彼らに日本に住んでいるブラジル人についてもっと知ってほしかったからです。

大嶋さんが両校の架け橋になってくれて、まずは、手紙の交換から始まりました。手始めに自己紹介と自分の好きなものをテーマに絵を描いて送りました。大嶋さんと僕とで簡単なポルトガル語を教えて、あいさつと自分の名前はみんなポルトガル語で書きました。はじめは、「ブラジル学校と手紙交換やるよ」というと、「え～、またミュージカルがしたい」という非難の声……。心が折れそうになりましたが、ウテさんの声がまた聴こえてきて、必ずいいものになると自分を奮い立たせ、交流を続けました。

しかし、手紙の返事が返ってきたところから、彼らは変わり始めました。オプソンの子どもたちから送られてきた手紙の中に自分の名前を見つけた途端、子どもたちの目は光り輝き、食い入るように手紙を読んでいました。「私の絵がかわいいって書いてある」「サッカーが得意なんだって。おれと一緒だ。いつか一緒にやってみたいな」「休み時間にはドッジボールをやってるらしいよ。うちらと一緒だよね～」なんて声があちらこちらで聞こえてきて、こちらが何も言わなくても「先生、手紙の返事書いていい？」

この手紙を書いた子たちはどんな子たちなの？友だちになれるの？もっと知りたい！そんな彼らの心の声が聴こえてくるようでした。

そんなやりとりが二～三回続きました。回を重ねるごとに彼らの気持ちは大きくなってきて、そしてとうとう「会ってみたい！」両校の子どもたちの想いは、僕と大嶋さんの手を離れ、どんどん大きくなっていくようでした。しかし、ここが公立小学校の限界……。子どもたちの想いを叶えるために、校長にも何度も掛け合い、交渉しましたが、遠く離れた神奈川県の公立小学校と茨城県のブラジル学校とが直接出会うことはあまりに困難でした。

直接は会えない代わりに、最後の交流は手紙ではなく、ビデオレターを作ることにしました。子どもたちが簡単なポルトガル語で自己紹介をし、自分の特技を披露して、それをビデオに収めてオプソンに送りました。それがなかなかの力作！完成試写会を大嶋さんと一緒にして、みんなで大笑いしました。満を持して、大嶋さんにビデオレターを託しました。そして、そのビデオレターのお返しが返ってきました。

自分の名前が書かれた手紙を大事そうに見せながら「ありがとう」と言ってくれた女の子や、サッカーの勝負をしようと約束してくれた男の子、歌を披露してくれた女の子……。ビデオの先にいる相手に想いを馳せて、心のこもったビデオレターをみんなで観ました。その時の子どもたちの嬉しそうな顔、そして、真剣なまなざし。

小学校の六年生の社会科の教科書には、「在日外国人」についての記述があります。でも、それはたった一ページの中の数行です。しかし、今回彼らが手紙やビデオレターで交流したのは、教科書の中の一言で片づけられている「在日外国人」ではなく、休み時間には騒ぎ、好きな食べ物はお寿司やラーメンで、クリスマスを楽しみにしたり、おしゃれが好きだったり、サッカーやドッジボールをやったりする自分たちと何も変わらない子どもたちでした。それよりも、彼らは日本語もポルトガル語も話せるとか、大人っぽいとか、歌やダンスがうまいとか、相手を尊敬する心さえ生まれていたように感じます。

その後、一年間の交流の感想を発表してもらったとき、「最初は、どちらかというと、先生に無理やり交流させられている感じだったけど、今はみんな本当に交流したいと思ってやってるし、オプソンの子たちはもうおれらと友だちだよ」という子どもの素直な感想が出てきたときには、僕も大嶋さんも心の中でガッツポーズしました。

ブラジル学校の子どもたちの中には、日本の公立小学校でうまくいかなかった子もいたようで、でも、今回僕のクラスの子たちと手紙やビデオを通じて交流することができて、オプソンの先生方もとても喜んでいると聞きました。

僕と大嶋さんが今回彼らの中に植えた種がこれからどんな風に育っていくかはわからないけれど、これから多文化共生の日本の中で生きていく彼らがもう少し大人になったときに、異文化をもつ人たちと対立したり、壁を作ったり、排除するのではなく、共に手を取り合って生きていく道を見出してくれれば。そんな優しくて、世界に誇れる日本をつくる大人になってくれれば。少なくとも社会の教科書に数行しか載っていない在日外国人に関する記述よりも、今回の交流は子どもたちの心が伴う、血の通った、そしてこれからの彼らの生きる未来を明るく照らす学びになったと思います。

これが、ウテさんの言う「花」なのかどうかわかりませんが、モンチアズールでまいた種が、自分の目の前の子どもたちに少しでも影響を与えていると思うと、とても嬉しく思います。そしてこの度、五年の経験を経て、兼ねてから目指していたＪＩＣＡの青年海外協力隊に応募し、合格することができました。しかも、国は偶然にも現在、ＣＲＩメンバーの西原里依さんが活動するグアテマラ！今から二人でＣＲＩグアテマラ支部を立ち上げようと意気込んでいます。この四月から二年間、小学校教師として現地の教員養成校で算数を教えるプロジェクトに関わります。モンチアズールで植えた種は確かに僕の中でまだ息づいています！

＊川原翼
ブラジル生まれ、日本育ち。二〇〇五年～二〇〇六年、モンチアズールでボランティア活動（一年間）。その後、神奈川県の小学校教師となる。現在、ＪＩＣＡ青年海外協力隊として現職参加で、グアテマラの教員養成校に小学校教員として派遣予定。

CRI 2013年総会報告

【日時】 2013 年 3 月 31 日（日）13:30 − 17:00
【場所】 神奈川県立かながわ労働プラザ
【参加人数】12 名

福井俊紀

1. 代表あいさつ、アイスブレイキング

2012 年から CRI 代表を務める宮ヶ迫ナンシー理沙より、開会のあいさつがあった。今回は、昨年度から日本国内におけるブラジルコミュニティとのつながりを中心に活動してきた一年を振り返り、今後の CRI のあり方について考える時間にすることを目的に総会がスタートした。
総会参加者は常連の CRI スタッフが中心だったが、中には初対面のメンバーや今回初参加のゲストの方もいたため、まずはみんなで輪になり、自己紹介を行なった。

2. 2012 年活動報告、会計報告

CRI 運営委員の大嶋敦志より、2012 年の活動概要を説明。同じく運営委員の川原翼より、本人の職場である神奈川県の公立小学校とブラジル学校「エスコーラ・オプソン」の生徒達のお手紙・ビデオレター交換の活動詳細を説明。実際に交換したビデオレターを上映し、心の通った交流の様子に会場一同感動。活動の末、両生徒たちは直接会うことができなかったが、子供たちの本当に会いたがる姿を見られたのが、今回の活動の成果だったと報告。また、川原が企画・運営したバイオグラフィーワークの活動を報告した。会計報告として特記すべきは、昨年、助成金「かながわボランタリー活動奨励賞」を獲得したこと。助成金の明確な使い道は決まっておらず、来年の予算へ繰越処理を行う。

3. 今年度活動計画、予算報告

今年度は、実際に活動を企画し、頻繁に現地に出向けるスタッフがいない状況。そのため、東海大学の学生グループ「Beijo me Liga（ベイジョ・ミ・リーガ）」などの活動現場に出向き、広報や情報交換を中心に活動していく予定。昨年度の活動で培ったネットワークを絶やさぬよう、限られたリソースで活動していく道も模索すべきという意見もあった。そのためには、ベイジョ・ミ・リーガとの連携が必要になるため､意見共有を目的に最低年に一度のミーティングの場を持っていきたい。“CRI”の団体名称について、活動内容が分かりやすいよう改名する提案も出た。

4. 北海道「ひびきの村」体験記

昨年度から CRI の活動に積極的に関わる本多優加より、北海道にある「ひびきの村」に滞在した三週間の体験や感じたことを報告。「ひびきの村」はシュタイナー思想に基づくコミュニティであり、CRI が発足以来支援を続けているブラジルのコミュニティ「モンチアズール」ともその基盤とする思想に共通点がある。本多は故郷の石川県とは大きく異なった都心での会社生活に疑問を感じ、北海道行きを思い立った。「ひびきの村」での滞在中は、シュタイナー思想を学び、それに関連する活動に参加するだけではなく、同地を取り巻く壮大な自然の素晴らしさ、偉大さを実感。都内での生活と比較すると、人工的な発展の虚しささえ感じるほどだったと語る。また、生態系の大いなる連鎖を感じ、自身の周りの環境・仲間への感謝の気持ちが湧いてきたと話した。

5.「モンチアズール」ボランティア帰国報告

今春、東海大学を卒業した村田美帆は、二〇一二年八月から二ヶ月間モンチアズールでのボランティア体験を報告した。食堂や学童保育での活動だけではなく、ブラジルでの生活全体で感じたことを紹介。特に活動開始当初は、生活、言語面で苦戦しながらも、周りの人間に支えられ、今となっては忘れられない経験になったと話した。「モンチアズール」で特に力を入れて頑張った活動として、日本祭りの準備・開催に奔走した日々を発表。
写真を見せながらの報告だったため、会場にいた元モンチアズールボランテイアは、懐かしい現地の人の顔が見ることができ、自身の経験と照らし合わせながら発表を聞いていた。日本祭り開催の意義に悩みながらも、多彩で大掛かりな出し物が盛りだくさんの日本祭りを大成功に収めた村田を含む日本人ボランティア、そして現地のスタッフの行動力、エネルギーが伝わってきた。

6. 2013 年運営委員選出

2012 年から 2 年間の任期で選出されている小貫大輔、宮ヶ迫ナンシー理沙、大嶋敦志、福井俊紀は今年度も継続。川原翼は外国への渡航により任期途中で抜けるため、稲谷千妃呂の立候補を後任として承認。その他のメンバーからも積極的に関与したいという声が上がったが、今回は関東在住で定期的に直接顔を合わせることができるメンバーを運営委員の役職とすることとなった。

7. 2012 年度総会を終えて

総会の活動報告は、実際の現場の様子や当事者の思いが良く伝わり、大変有意義な時間となった。総会後、参加者のほとんどが懇親会に参加。久しぶりに顔を合わすメンバー同士で、近況報告を行ったり、ブラジルでの思い出を語り合ったりする良い機会となった。
一方、参加者が少なかったことを反省点としてとらえ、今後は広報活動などを工夫し更に魅力的なイベント作りを目指していきたい。また、一年間 CRI の活動に関わってきたベイジョ・ミ・リーガやブラジル学校の関係者などにも参加していただけるよう調整が必要。

2013 年度運営委員の紹介

代表
宮ヶ迫ナンシー理沙

2 月から、神奈川県川崎市の東側京浜工業地帯、桜本にある社会福祉法人青丘社で障がい児の余暇支援に携わっています。高校生のときからなにかと縁のある場所でしたが、モンチアズールに行って帰って来てから、さらに強く惹かれるようになりました。青丘社（モンチ：丘・山、アズール：青）という、まるでそっくりな名称から、幼児教育をはじめとした教育活動、障がい児の余暇支援、高齢者福祉、ハルモニ（韓国・朝鮮語でおばあちゃんの意）たちの識字学級、夜の成人学級など活動の内容やその発展が両者ともに似ていることがおもしろいのです。いままで勉強してきた点が、活動を通してつながっていき立体的になっていく今が楽しいです。
国籍が異なることや、障がい等、特別な配慮が必要な子どもたちの教育には、理不尽な現実がいろいろとあります。考えれば考えるほど、関わっていけばいくほど、まるで出口の見えない大変なことと感じます。
大きな仕事をかたづけようとただがむしゃらにやると息があがって、動けなくなってしまう……ミヒャエル・エンデ『モモ』のなかで、掃除夫のベッポさんが言っていたことをいつも思い出して、ちょっとずつちょっとずつ目の前のことを一生懸命やっていきたいと思います。
「いちどに道路ぜんぶのことを考えてはいかん、わかるかな？つぎの一歩のことだけ、つぎのひと呼吸のことだけ、つぎのひと掃きのことだけを考えるんだ。いつもただつぎのことだけをな。」

小貫大輔

長かったブラジルでの生活（というか日本とブラジルを行き来する生活）に区切りをつけて、七年前から東海大学の国際学科で教えるようになり、日本で暮らしています。大きな挫折を体験しての帰国、死ぬかと思うほど辛い日々をへて、気がついてみると人生の新しいフェーズが始まっていました。住むところを変えて、話す言葉が変わり、一緒に暮らす人が変わり（離婚・再婚を体験し）、生業が変わる（不安定だけどエキサイティングな国際協力の仕事から、安定した収入と毎年繰り返すリズムに刻まれた仕事に）ということは、「別人になる」ような体験です。数年間はストレスを最小限に抑えることに腐心し、おとなしくただ淡々と仕事をしていました。そんなときではありましたが、「在日ブラジル人教育者向けオンライン教員養成講座」という、ブラジル政府が資金を出す大きなプロジェクトが降ってわいて、それを自分の大学に取りつけて中心的役割を担うようになりました。両手両足の指のほとんどを凍傷で失った登山家夫婦が、再び絶壁を目指すまでのドキュメンタリーを見ましたが、当時の自分と重なって涙が止まりませんでした。当時の自分を城のように囲んで守ってくれたのが、CRI の現運営委員のメンバーたちでした。やがて、ブラジルとの協働プロジェクトも動き出し、自分の学生たちもブラジル学校に行ったりブラジルにボランティアに行ったりするようになりました。今では城の周りに城壁まででき て、その中では（大学の仕事場だというのに）当たり前にブラジル式のキッスで挨拶が交わされているほどです。挫折とは「自分の思い通りにいかないこと」だと思います。自分ではなく、神様の意志に導かれているのだと信じられたら、あんなに怖くなかったのかもしれません。44 歳から 50 歳ぐらいにかけて体験したことでした。

稲谷千妃呂

先日ボランティアをしてきました。東日本大震災の津波で流されたアルバムの写真洗浄です。汚れてしまったアルバムから写真を取り出し、一枚ずつ泥などを落としてきれいな状態にした後、新しいアルバムに写真を収めます。地震の後、何かしたいと思っていたけれど東北へ行かないと何もできないと思っていました。それがまさか関東にある我が家の側でできてしまうとは。写真を一枚一枚きれいにしていくのは小さなことですが、流されたと思った自分の写真を見つけた持ち主の嬉しそうな顔を見ると、とても大きな活動だと思いました。私たち CRI も小さな活動ですが、「全てはほんの小さなことから始まる」というモンチアズールのウテさんの言葉（『耳をすませて聞いてごらん』小貫大輔著）を胸に、今年度も活動を続けていきたいと思います。

福井俊紀

大学在学中にブラジル、モンチアズールと出会い、計二年間現地でのボランティア活動を行いました。特に 2009 年には、CRI が実施したモンチアズールでの保育園建設プロジェクトにおいて、現地スタッフとして活動させていただき、非常に貴重な経験を得ることができました。ブラジルで学んだことは、みんなで一緒に食べる手作りのご飯ほど美味しい食べ物は、この世にはないということ。ブラジル人の陽気さとブラジルの美しい海岸が大好きでした。

私は生まれも育ちも大阪ですが、現在は都心で働く 26 才。世界の中でも超先進的な都心での会社生活を送ることができる一見幸せな感覚と、一方で会社に依存しないと今の生活を維持できないという虚しい感覚が半分半分くらいで今の私は構成されています。自分のことだけで精一杯になりがちですが、CRI の活動を通して少しでも社会を俯瞰し、ブラジルとつながる問題に取り組んでいけるよう意識していきます。ブラジルでの経験や、それを共有している CRI の仲間にいつもお世話になってばかりですが、今後とも宜しくお願い致します。

大嶋敦志

2 月 5 日から 45 日間、東南アジアを放浪してきました。4 月から会社勤めをする前に、感性に磨きをかけてから新生活に臨みたいと思ったからです。ギターとスケッチブックを持って五カ国を歩き、たくさんの友だちと、素晴らしい経験を得てきました。（詳しくは旅日記で http://mechamaatin.blogspot.jp/）旅先で僕はすぐに日本人と認識されて「アリガトウ」「コンニチワ」と現地の人に声をかけられました。これらが 1・2 番目に旅先で聞く事が多かったニホンゴです。3 番目は何かと言うと「カイゼン（改善）」です。数人からこの言葉を聞きました。彼らは大学でトヨタの生産方式を学び、それが彼らがイメージする日本なのだそうです。「改善」を英語辞書でひくと「Improvement」と出てきます。この日・英ふたつの言葉は同じ意味を共有しているように思えますが、彼らの解釈では「Improvement」は単に成長で、「カイゼン」は終わりのない向上心だから、それぞれ独立している、とのこと。なるほど。
「カイゼン」この言葉を逆輸入して今後のＣＲＩ活動と新生活に取り組んでいきたいと思います。応援どうぞよろしくお願いします！

事務局スタッフ
宇都野 真利夫

皆さんこんにちは、今年から CRI でアルバイトとして手伝っている東海大学教養学部国際学科三年生の宇都野真利夫です。名前からちょっと感じられる通り僕は世に言われる、外国にルーツを持つ「ハーフ」です。父親は日本人で母親はホンジュラス人。生まれは日本なので性格は日本人よりなのですが、ホンジュラス人の母の血が強かったせいか見た目はほぼラテンアメリカ人です（笑）。

CRI- チルドレンズ・リソース・インターナショナル

2012 年　収支決算書（2012 年 1 月 1 日～ 12 月 31 日）（単位：円）

収入の部

前年からの繰越	1,059,714
会費 / 寄付収入	1,118,77
寄付収入・個人（40 組）	
寄付収入・団体より（2 団体）	
Escola Resiliencia への緊急募金	（107,000）
国内事業収入　　販売・イベント参加費	22,800
助成金：かながわボランタリー活動奨励賞	800,000
銀行利息	211
収入計	3,001,502

支出の部

《事業費》	
Panasonic NPO サポートファンド	613,370
ワークショップ実施経費	21,523
Escola Resiliencia への寄付	150,000
《事務局諸経費》	
備品消耗品	11,139
郵送・運搬費（通信を除く）	3,240
広告宣伝費（写真現像／パンフレット印刷）	7,190
通信費（ネットサーバー）	19,800
人件費	262,500
交通費	109,932
会議費	2,500
振込手数料	1,365
その他　書籍購入	3,878
《CRI 通信》	
謝金（編集、インタビュー）	40,000
通信印刷代	28,400
通信送料	23,750
2013 年前半期への繰り越し	1,702,915
支出計	3,001,502

CRI- チルドレンズ・リソース・インターナショナル

2012 年　事業報告書（2012 年 1 月 1 日～ 12 月 31 日）

1. 神奈川県央地域（愛川町・厚木市）における交流企画

昨年にひきつづき大嶋敦志を中心に「Escola Aquarela Brasil」の保護者、子どもたちを対象とした外遊びの企画を数回行った。さらに、香村真理子さん（Marie）の協力を得て、手作り人形の人形劇と凧づくりのワークショップ、手作りランタンを持って町を歩くランタンウオークも行った。ワークショップには地域の自治会の協力もいただき、回覧板などでお知らせできた結果地域の方の参加もあった。

また新たな試みとして、神奈川県の公立小学校とオプソン校とのお手紙交換による日本の学校とブラジル学校の生徒たちの交流を行った。 日本の学校の生徒はポルトガル語で、ブラジル学校生徒は日本語で、それぞれに工夫を凝らし手紙を書き、ポジティブなコミュニケーションを交わすことができた。

神奈川県での活動のほか、茨城県のブラジル学校とも定期的な交流を行った。2 月にエドゥカーレ校において手打ちうどんづくりワークショップ、10 月はオプソン校を中心とした地域交流シュハスコ会に参加。地域住民の方々とのコミュニケーションの架け橋となるよう働いた。11 月には、オプソン校の生徒たちの企画による国際交流キャンプのアドバイザーとして参加した。

2. 研修・講座の企画

・バイオグラフィー勉強会（2012 年 9 月～ 2013 年 1 月）

秋元香里氏を講師に向かえ､5 回にわたり 30 代までの 7 年期を振り返った。

・安藤将の帰国にともない情報交換会を実施した。

3. 広報活動

情報公開をさらに積極的に行えるよう facebook ページを立ち上げた。

CRI facebook page :

https://www.facebook.com/cri.monteazul

4. モンチアズールコミュニティ協会へのボランティア志望者へのアドバイスおよび渡航のコーディネート

佐々木夢郎さんが 1 月に渡航した。ボランティアビザの取得を目標としていたが、現地受け入れの変更に伴い書類が遅れ、当初の計画を変更し 3 ヶ月の予定で渡航することになった。ビザの取得についての情報収集に課題が残った。

モンチアズールコミュニティ協会へはそのほか、10 月６日に開催された、日本祭り開催のために情報提供などの協力を行った。レジリエンシア学校への緊急支援を呼びかけ寄付金を届けた。

5. くりあんさブラジル通信（年 2 回）の発行・発送

昨年度末、78 号の発行が遅れ 2013 年 1 月に発行された。

番外

Panasonic NPO サポート ファンド 組織診断事業

（2011 年 11 月 -2012 年 5 月）

都内各地での研修に参加 / 課題解決のための会議を行い、団体のミッションについて再考した。

CRI- チルドレンズ・リソース・インターナショナル

2013 年　収支予算書（2013 年 1 月 1 日～ 12 月 31 日）（単位：円）

収入の部

前年度からの繰越	1,702,915
事業収入	50,000
会費・寄付収入	400,000
収入計	2,152,915

支出の部

交通費	200,000
人件費（謝金）	250,000
会議費（1or2 回 / 1 月）	30,000
イベント開催（講師謝金、会場費など）	100,000
《事務局経費》	
備品消耗品	20,000
郵送・運搬費（通信を除く）	10,000
広告宣伝費（写真現像／パンフレット印刷／ホームページ）	100,000
インターネットサーバー	20,000
《CRI 通信》	
通信印刷代	100,000
通信送料	30,000
その他消耗品（封筒 , はがき等）	20,000
謝金（編集）	30,000
2014 年前半期への繰り越し	1,242,915
支出計	2,152,915

CRI- チルドレンズ・リソース・インターナショナル

2013 年　活動計画書（2013 年 1 月 1 日～ 12 月 31 日）

1. 愛川町・厚木市　神奈川県央地域における交流企画

県央地域には、外国人が集住しているが、ブラジル学校の位置する厚木・愛川地域において、地域社会とブラジル人コミュニティをつなぐための交流イベントを月に 1 回程度、企画運営する。また必要に応じての情報支援活動。

・ニーズ把握　・ネットワーキング

2. 研修・講座の企画

・幼児教育に関する勉強会

・各種ワークショップ（異文化理解ワークショップ、講師派遣）

・情報交換会（他団体より講師を招いての勉強会）

3. 広報活動

・ 効果的な広報ツールについて検討を行う。これまでの歴史がホームページで見られるよう整備をするとともに、CRI の理念が誰にでもわかるようにする。

・これまでの関係メディア取材記事等閲覧可能にする

・チラシ、パンフレットをリニューアルする。

・活動報告を徹底する。

・ ホームページの翻訳化（ブラジル人も活動が読めるように、ホームページで見られるようにする）

4. モンチアズールコミュニティ協会へのボランティア志望者へのアドヴァイス、および渡航のコーディネイト

希望者がいる場合に適宜行う。

5. 東海大学の学生グループBeijo Me Ligaが企画するマルチカルチャーキャンプに対して人材支援

6. くりあんさブラジル通信（年２回）の発行・発送

初夏と冬に 1 号ずつの発行。

今年三月、東海大学の学生たちが二週間ブラジルへスタディツアーにいってきました。彼らのレポートの一部をお届けします。

ブラジル スタディツアーレポート

宇都野真利夫

春休みに二週間ほど大学の海外研修プログラムとしてブラジルに行ってきました。ホンジュラス以外の中南米の国に行くのは初めてで、ホンジュラスとあんまり変わらないだろうと勝手に決め付けていったのですが、思い描いていたラテンの国とは違い新しい体験ばかりでブラジルの人々、風景、カルチャー、言ってしまえば全てに魅了されました。ブラジルは思っていた以上にでかかった。

今回のブラジルスタディーツアーのプログラムとしてマトグロッソ連邦大学（UFMT）を訪れる目的がありました。自然が多いパンタナール州にあるUFMTでは多くの教授が自然環境の研究をしているそうです。UFMTとの交流を深めるために今回、日本の自然との付き合いかたの一つとして、「里山」と自然から生まれた色を使った「草木染」のプレゼンテーションの準備をブラジルに行く前から行いました。みんなで調べたり、話し合ったりするだけでなく実際に里山を訪れ保全の仕方や里山自体の仕組みなどを人間環境学科の先生に教わったりしました。スタディーツアーの期間は二週間と短かったがやることは多く毎日が忙しい日々でした。

初日の夜は、Cultural Nipo-Brasileiro（日伯文化協会）でお世話になりました。ブラジルにいながら日本を感じさせる不思議な場所でした。ブラジルの日系人社会には県という括りでのコミュニティがたくさんありました。日系人にとってアイデンティティや存在意義を確かめるひとつの支えなのかなと思いました。

二日目の朝、カンピーナスにあるホンダの工場見学にいきました。ブラジルは車の販売台数で去年ドイツを抜いて世界第四位の自動車市場となっており、今後二〇一四年のワールドカップ、二〇一六年のオリンピックと経済成長が期待されていることもあり自動車会社はブラジルの市場に力を入れていることをブラジルに行く前に様々な人から聞いていました。見学にいって思ったのは日系人の多さ。工場で様々な所を歩き回りましたがその箇所その箇所日本語を話せる人がいて現地の人々との言葉のやりとりにもまったく問題がなかったこと。日系人がいるブラジルならではの現象で他の国の工場ではそうはいかない事を、日本から赴任されている昆さんから聞きました。日系の人々は日本の習慣や文化というものを少なからず親から受け継いでいる人がいるのでブラジル人よりもてきぱきと仕事ができる人が多いそうです。

その後、カンピーナスにあるシュタイナー学校に行きました。学校のまわりはほぼ緑一色。自然の中に出来た学校にいる人々は何か変わった雰囲気を持っているように思いました。僕は漢字のアクティビティには参加せず草木染めに参加しました。ほぼ自然のものだけを使った草木染めで、日本の練習時に使った化学用品は使用しませんでした。色を定着させるために牛乳を使ったり、酢やミョウバンなどもつかったりどうやってその方法を見つけたのか不思議でしょうがなかったです。

三日目、サンパウロにあるファベーラにいきモンチアズール・コミュニティー協会で活動をみることができました。モンチアズールの活動の規模は思っていた以上に大きかった。一つの組織としてこの場所にとって欠かせない存在になっていること、モンチアズールの一員としてサンパウロに存在する問題に直面できること、ここで活動しているボランティアはモンチアズールをひとつの学びの場所だといったこと……。モンチアズールという場所は様々な分野で人を成長させることができるすごいところだなと思いました。パンがもっちりしていておいしかったことも衝撃的だった。こういう貧しい場所では料理の勉強もあんまりしていない人がパンを作っていると思ったが、考えてみればモンチアズールには様々な人々がいる。ある日本人が日本の歌をモンチアズールの子供たちに残していった様に、パンの作り方も海外やブラジルのどっかからやってきたのかなと勝手に想像していました。そう考えるとモンチアズールのコミュニティーは小さな国際街なのかもしれない、人々の感性も違ってみえるのかなと思いました。

四日目にはリベルダージという駅に着きました。なにやらアジアの雰囲気を持った建物がいっぱいありました。泊まったホテルの名前も日本っぽいアカサカという名前でした。その日はイビラプエラ公園にいき自然染色研究家の久子さんと草木染め展示会にいきました。草木染めの作品にはビデオテープやとうもろこしの皮を使った作品があり色々なアイディアがあることに感動しました。使えるものってこんなにもあって全部アートに変身する作品たちはそれぞれ自己主張をしているかのように一つ一つが目立っていました。

五日目UFMTとのプログラムのために、クイアバ、パンタナルに行きました。プログラム初日はシャパーダに行きどのように自然保護区域が成立、確保されているのかを聞きました。その帰り道にセハードといわれる農場区域に行きました。ブラジルの政策としてものすごく成功した区域でもあるが農薬など使う分、土地がどんどん悪くなっていき後には植物が育たない場所になってしまうそうです。成長を続ける国の光の当たらない影の部分を目のあたりにしました。

プログラム二日目には南米のへそといわれる場所に行きました。その場所にはパワーの源があるそうで感じることのできる人には神聖な場所だそうです。僕は感じませんでしたが南米のへそからみえる景色は壮大で大自然を垣間見ることができました。人間社会とはなにか、パンタナルにいると動物や植物に関して考えたくなってしまいます。

三日目にいったのはパンタナルの大湿原地帯にあるSESC（セスキ・ブラジル商業連盟社会サービス）に行きました。この施設で見た中で印象的だったのが蟻。蟻の巣を観察出来る部屋がありそこで巣の構造や蟻の種類や役割について学びました。女王のために働く蟻たちは人間の昔の社会みたいで、虫の中で人間に近い存在と思いました。

プログラム四日目、自然との関わりを大切にする環境維持学校を見学しました。学校内でリサイクルをしていたり、すべて自然に還すことができる資材を使用していたりするそうです。そんな自然と共生している学校でおもしろいと思ったのがパソコンというテクノロジーを使っているところ。教育という意味で必要なものは何か考えさせられました。大学の先生たちの中には、自然環境のことについて研究している人もいれば社会とコミュニティについて調べている人もいて自然環境という括りの中でも様々なつながりがあるのだなと思いました。

二週間ブラジルに滞在して毎日が楽しかったです。またポルトガル語を頑張って話そうとしましたがスペイン語（エスパニョール）と混ざってしまい、ポルトニョールになってしまいましたがそれでも伝わりました。出会う人出会う人女性ばっかりだったこともインパクトがありました。本当にどこいっても女性が目立っていた。全体の旅を通して出会う人みんな良い人で楽しい時間を過ごせたことはずっと思い出になると思います。ブラジルという国を実際に感じ取った今、日本で出来ることも確実に少し増えたのだと思うので日本でこの経験を活かせたらなと思いました。

ブラジル海外実習を終えて Viva! Brasil!

大塚紀巴（三年生）

旅に出る前には、わくわくする気持ちで溢れていて、帰ってきた後は旅の思い出に浸るというのが私のいつものパターンなのだが、今回のブラジルへの旅はこのレポートを書いている今でさえ興奮が収まらない。むしろ帰国した後のほうがドキドキ、わくわくしているように思う。頭の中がブラジルのままなのである。そのせいか、日本に戻ってから改めて、この国の便利さや人々の真面目さに感心する一方で、冒険がない、人々のエネルギーが足りないと感じている。まるでブラジルとは逆さじゃないかと思った。ブラジルと日本は正反対の場所にあるが、その影響を受けたかのように文化までもがこんなにも逆さだとは思いもしなかった。日本の成田空港に、三月二十三日に無事到着した瞬間に、少しでも早く冒険とエネルギーで溢れるブラジルに戻ろうと決心したのであった。

三月十日からの約二週間の旅は短かったけれども、ブラジルで飲んだ最高に美味しいマンゴー百パーセントのドロドロのフレッシュジュースに負けないくらい濃いものだった。全ての出会い、経験が素晴らしいもので、とてもレポートには収まりきらないだろう。ヴェレーダス（カンピーナス）のシュタイナー学校での授業、モンチアズール、クイアバの大自然、そしてブラジル人……。こんなにも様々な肌の色や骨格、目の色を持つ人々が集まっていることへの羨ましさを改めて感じた。違うことに最も柔軟な人種なのではないだろうか。彼らと一緒に過ごしていると、本当に心が穏やかになった。それは、きっと彼らの動き一つ一つにブラジル人ならではの暖かさがあったからではないかと思う。そして、日本で過ごしていると「これじゃ駄目だ、あれじゃ駄目だ」と自分のことを否定しがちなことも、ブラジルで様々な人と関わっていくうちに、「ああ、これでもいいのかもしれないな、もっとこうしてみよう」というふうに変わっていったことを覚えている。

後半のクイアバでの時間は本当に心躍るもので、もうディズニーランドじゃ物足りないと思うほど見たことのない素晴らしい世界だった。また、この旅で正直に一番嬉しかったことは、セルジオ・メンデスの「マシュケナダ（Mas que nada）」を連邦大学のルシアさんにすすめられて歌った時に、みんなが盛り上がってくれたことだった。全く上手く歌えなかったのにそれでも盛り上げてくれたことが私にとっては本当に嬉しくて、自分自身への自信につながった。「上手く出来るか出来ないかはさておき、とにかくやってみよう」という姿勢の大切さを感じ、これから国際的に活動したいと思っている私にとってこの出来事は非常に大きな収穫となった。

旅を終えて、やはり思い知らされることは、自分がまだまだ外見も中身も子供だということだ。「私は二十歳ですよ。」と自己紹介する度に、「マジで？信じられない!!」という子どもたちの反応にも慣れてきてしまった。一方で、このままでは良くないと焦りを感じ、自分自身を磨き、もっと独立しようと本気で思った。

エリゼッチさんのお話を聞く&岩本季和さんの帰国報告会

宮ヶ迫ナンシー理沙

二〇一三年三月三日(土)、日本に滞在中だったエリゼッチさんのお話を聞く&二月末に一年間モンチアズールコミュニティー協会(以下、モンチアズール)でのボランティア活動を終えて帰国した岩本季和さんの帰国報告会を開きました。

会場は、横浜市あざみ野にある「スペースナナ（＊）」というコミュニティーカフェ。個人的には、「ださくないコミュニティースペース」をテーマとしていることがステキだと思っています。その理念の通り、木造で暖かみのある空間の中、なごやかな雰囲気で会を開催することができました。

モンチアズールで寄付金が激減してしまっている状況の背後とは

エリゼッチさんは、十歳のときに、ウテさんのもとで暮らしたいとお姉さんとともにサンパウロに来ました。人生の長い時間をウテさんとともに過ごし、モンチアズールの成長を一緒に支えてきた人の一人です。日本にいるとなかなか見えてこない、モンチアズールの置かれている状況の細かな背景をお話してくれて、わかりやすかったです。すこし、まとめてご報告します。

■ルラ元大統領からの左派政権がすすめたFome Zero（飢餓ゼロ）という国策

Fome Zeroは国の貧困問題に取り組む大きなプロジェクトの名称で、そのなかには、家族支援、就業支援、就学支援などの大きく八つのプログラムが実施されていました。注意すべきは、それらのプログラムが、最も貧しいとされるいくつかの地域で集中的に取り組まれたということです。国として、その後の貧困の解消度合いを測る調査で、国内の極めて貧しい地域において指数が改善されたという結果が、国全体の貧困状態が改善されたという拡大解釈を産んでしまったのです。

ルラ元大統領は、ブラジル史上もっともいろいろな国を外遊してまわったと言われるが、そのなかで、自分の政権時代の取り組みにより、極めて深刻だった貧困の問題は解消にむかっており、ブラジルはもはや途上国ではないし、海外からの助けは不要である種のことを伝えて歩いてしまいました。それにあいまって、二〇〇八年末の世界的な経済危機によって、ブラジルへの、というか、モンチアズールへの寄付金は激減してしまったのです。

■ますます大きくなる政府

ルラ元大統領からの左派政権は、政府の取り組みにより成果が出て来たという自負によって市民側、NGOなどの自由な活動に制限をかけるようになってきています。その例が、教育の分野で、市民による学校運営に規制がかかり、補助金が切られてしまっています。現場で仕事をしている私たちNGOとしては、貧困が解消されたなどとはまったく感じていないし、むしろ社会格差は拡がっているのが実感なのです。

■モンチアズールは恵まれているじゃないか、という誤解を招く状況

モンチアズールには一千人を超えるコラボラドーレス（協力者）という職員がいます。でもそれは、ある特定の事業に携わる職員を合わせた総数なのです。前述した、Fome Zeroの一貫である、公衆衛生のプログラム〝Saude da Familia〟があります。貧しい地域での保健衛生の課題を解消するために、訪問医療等を行っています。運営は行政単位で行われますが、それらはさらにモンチアズールのような団体に委託されています。

そのための運営資金が団体には入ってくるわけですが、それは、この事業運営のためだけに使われなければならないのです。つまり、実際のところモンチアズール独自の事業（幼児教育、青少年教育、職業訓練、診療所等）には、職員総数としては二五〇人ほどの規模なのです。ところが、団体の年次報告には委託事業費を含んだすべてが報告されるため、よく見なければ、一見、千人を超える職員数、そして多額な資金が動いているように見えてしまうわけです。そういった状況が、外部資金獲得をさらに複雑にしています。

■さらなる困難

その一

NGOの運営がますます厳しくなっているさらなる原因は、その資金調達の変化です。これまでは、各部署の代表者が集まり組織全体で話し合い、総合的に事業展開を行ってきました。しかし近年の資金獲得には、より具体的なプロジェクト設計、申請書が必要で、そのために部署毎で助成金等の資金獲得を行うようになりました。具体的なプロジェクトの実行を可能にするためには組織基盤を整えることなどの条件があるわけですが、プロジェクト単位で動くので、組織としては弱くなってしまうと言えると思います。

その二

ドイツや日本など海外からのボランティアの存在が、モンチアズールを支えているのですが、海外ボランティアの受け入れに関する法令が変わったことも私たちにとって大きな打撃です。今、ボランティアビザの取得がとても困難になっています。専門分野をもっていないと、ボランティアとして認められないのです。そこで、モンチアズールでは、近隣の大学と提携し、大学の研修生という名目でボランティアの受け入れを今まで同様にできるように体制づくりをしているところです。ビザ申請のために、提携先の大学からも書類を提出してもらわなければならないので、今まで以上に手続きが煩雑で、ビザ取得に時間と忍耐を要します。

いままでお話ししたいくつもの要因が絡んで、さまざまな困難を生み出しています。モンチアズールとして初めて設立した初等教育学校レジリエンシア学校が、昨年、行政からの補助金をカットされ突如として運営が困難になってしまったのは、このような流れのなかで起きたことでした。そんななかでも、私たちは活動を継続するために、いまいろいろと考えています。できれば、多くの方からアイディアやヒントをいただいて、組織として改善し、発展していくことを目指しているところです。

エリゼッチさん

岩本季和さんのサバイバル

季和さんは、二〇一一年二月〜三月に福井俊紀さん率いる「日本ブラジル交流スタディーツアー」に参加し（くりあんさブラジル通信）七五号「三十三日間ブラジルを北へ南へ」記事掲載）、その後、ブラジルで生活がしたい！とボランティアビザを取得し、モンチアズールで一年間活動してきました。ブラジル生活が始まった当初は、他に日本人ボランティアがおらず、思うように言葉が通じないなか、生活に必死で、目的を見失い、毎日辛くて帰りたくて、泣いて過ごしたといいます。

ポルトガル語はほとんどできない状態でブラジルに到着し、言葉の面（だけでも）で不安が大きいのに、十二歳から十五歳という思春期の難しい年齢の子どもたちを相手にした仕事を分担されてしまったことで、不安が増したそうです。さらに、「ポルトガル語の勉強をしなさい」と、半日は家に帰らされ一人で過ごすことになってしまったことが、まずブラジル生活の出だしを苦しいものしてしまったといいます。人との交流が少なく、ポルトガル語が上達している事も感じられず、焦り、ボランティアコーディネーターと交渉し、ならばと隣のペイーニャの学童で、七歳から十歳の子どもたちの担当をまかされました。しかし、今度は毎日一日中子どもたちと過ごすことになり、それはまたとても大変で、やはり疲れきっていってしまったそうです。

季和さんの強みは、辛さが貯まっていったときに、日本語で相談のできる相手を捜したり、仕事の内容についてコーディネーターと交渉をしたり、場面ごとに、その打開策を考え、行動に移していったことでした。まさにサバイバルのように扉がどんどん開いていった様子を聞いて頼もしく感じました。

カノアケブラーダ（＊）の日本祭りを手伝いに行くという名目で、モンチアズールの仕事をを免除してもらい、その二週間でリセットし、新たな気持ちでモンチアズール生活ができたそうです。初期は、言葉を覚えようと必死だったけれど、カノアから戻った後は「コミュニケーション」を第一に考え、言葉はそのついでに覚えようと、人との接し方を変えたことで、子どもとの関係もよくなり友だちもできて、ブラジル生活が楽しくなっていったそうです。

学生の時期にこういった経験をして、強く成長をしたのが感じられてとても元気がもらえました。私も、大学四年生とのときに生まれ故郷に対する強い思いで、モンチアズールへ行く機会に巡り会いました。いろいろな困難があったけれど、あのときの経験や、学んだことが今、いろいろな場面でつながっていくことを実感します。これからも、モンチアズールを知りたい、ブラジルに行ってみたいという人に、豊かな経験をしてもらえるようなお手伝いができると良いなあと思います。

＊スペースナナ
カフェもあり、フェアトレードの商品も販売をしています。企画展示や個展なども開催されています。http://spacenana.com

＊カノアケブラーダ
ブラジル東北部にある漁村。鈴木真由美さんが代表を努めるNGO、「光の子どもたちの会」が活動中。

岩本希和さん

イギリスシュタイナー幼稚園体験記　連載第二回

イギリスシュタイナー幼稚園へたどり着いて

稲谷千妃呂

四年間勤めた幼稚園を辞める決心をした私はCRI仲間の「まっさ」に伝えました。辞めてからどうするかまだ具体的に考えていなかった私に、当時イギリスのシュタイナー教員養成講座で勉強していたまっさは「シュタイナー教育に興味があるなら、海外のシュタイナー幼稚園を一度見てみるといいよ」とイギリスの幼稚園でのボランティアを紹介してくれました。そうして私はシュタイナー学校Michael Hallでボランティアできることになったのです。

この学校は、幼稚園から十二年生（高校三年生）までであります。幼稚園は六クラス、一年生から八年生は二クラス、九年生から十二年生は一クラスなので、一般の日本の私立学校に比べたら生徒の数はそれほど多くないでしょう。そんなことを思いながら初めて学校を訪れた時、敷地の広さにまず驚きました。どこまでも続く原っぱや森があって、小川が流れています。時々牛や馬が草を食んでいて、まるで牧場の中に学校があるようでした。夏になるとイギリス中のシュタイナー学校の五年生がここMichael Hallに集まって、Olympicという行事をするそうです。集まった五年生は校内でキャンプをするので、原っぱいっぱいにテントが張られるんだそうです。幼稚園では、先生や子ども達と学校内の色々な場所へ出かけましたが、本当に広くて、どこからどこまでが学校の敷地なのか最後まで見当がつきませんでした。

幼稚園園舎は、学校の受付や食堂から少し離れた所にあります。一階建てで、玄関は二つあり、中に入ると五つの保育室と職員の部屋が一つあります。（残り一つの保育室は、少し離れたガーデン（畑）の横にあります。）玄関と反対側には広い園庭が広がっていて、どの保育室も石畳のスペースを通って園庭に出られるようになっています。

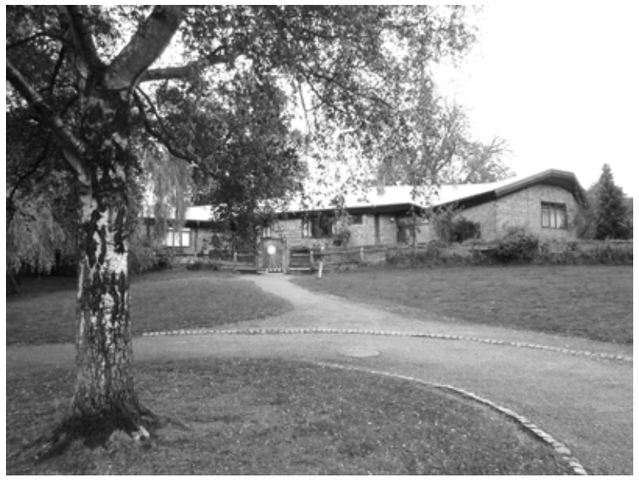
私はBernadetteの幼稚園でボランティアをしました。初め、「この学校には六つの幼稚園があるのよ。」と聞いたとき、『幼稚園』が六つもあるなんて、なんて子どもがたくさんいるんだろう！」と驚いたのですが、ここでは、「クラス」と呼ぶ代わりに「幼稚園」と呼ぶのでした。そして、「幼稚園」には決まった名前がなく、「Bernadetteの幼稚園」、「Markの幼稚園」という風に、先生の名前をつけて呼んでいました。自分の名前で呼ばれるからでしょうか、どの先生も自分の園に誇りをもって仕事をしている印象をもちました。週に一度だけ六人の教師が集まってのミーティングの他は、毎日の活動内容はそれぞれですすめていました。私は他の園でもボランティアを一日ずつさせてもらったのですが、子どものファンタジーを大切にしていたり、生活リズムを重視していたりと、同じシュタイナー幼稚園でも先生によって雰囲気が違うことを感じました。

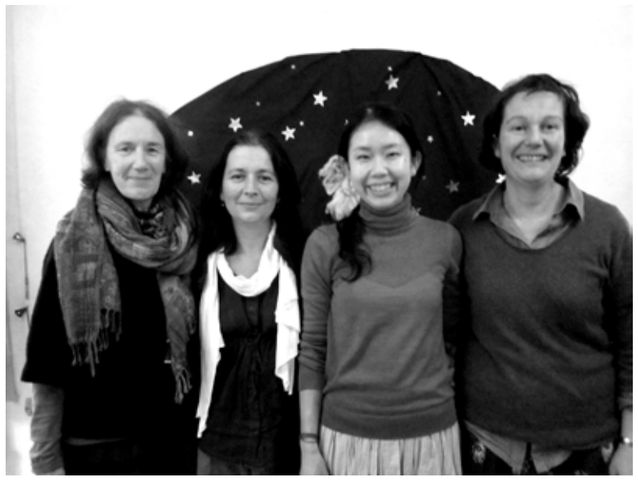
Michael Hallの幼稚園では、各園約二十名の三～五歳児（縦割り保育）が毎日八時から十二時までのお昼ごはん前までを過ごします。多くの方がご存知の通り、シュタイナー教育では生活リズムを大切にしていて、Bernadetteの幼稚園も月曜日は水彩画、火曜日はパン作り、水曜日は「探検」の日（一日戸外）……というように曜日ごとに活動が決まっていました。活動だけでなく、毎日食べる軽食とお茶の種類も曜日ごとに決まっていました。また、一日一度は必ず外へ出ました。Michael HallのあるForest Rowという村はイギリスの南にあるといえど、東京よりずっと寒く、イギリスの秋・冬は雨が多くて、じめじめしています。しかし、どんなに寒くても、雨が降っていても、たとえ短い時間でも必ず外に出ます。毎日降園前には、先生がお話を聞かせてくれるのですが、天気が良ければ外に出て聞くこともありましたし、Ring time（ライゲン、表現遊び）をすることもありました。子どもも大人も、レインジャケットとレインパンツ、ニット帽と長靴、手袋を身に着け、しっかり温かい格好で外に出ます。寒がりの私はイギリスの気候になかなか慣れず、毎日持っているだけの服と靴下を重ねて外に出ていました。

Bernadetteの幼稚園には、彼女の他に二人のアシスタント、JuliaとMarianがいました。子どもは三歳から七歳まで十八人で、毎日来る子どももいれば、まだ入ったばかりだから週三回など、子どもによって違いました。ボランティアを始めてすぐに、私は彼女の幼稚園が大好きになりました。穏やかでとても温かい雰囲気に包まれているのです。それは彼女の人柄そのものだと思います。子ども達一人ひとりの気持ちに寄り添って保育をしていました。笑顔でゆったり迎えてくれる先生達と落ち着いた雰囲気の保育室では、子どもたちも穏やかに過ごしていました。そして、彼女の保育がスムーズにいくには、JuliaとMarianのサポートが欠かせません。互いに信頼し合っている三人のチームワークは、素晴らしいものでした。イギリスにいる間、私は毎日幼稚園へ行くのが楽しくて仕方なかったです。もし子ども時代の私が通っていたら、この幼稚園が大好きになったに違いありません。大好きな先生に見守られているのを感じながら、毎日を過ごせるのです。

Ring timeは基本的に毎日あります。季節や子どもの様子に合わせて二、三週間おなじものを続けます。一週間だけ、私は日本語のRing timeをさせてもらいました。毎日Bernadetteがしているのを見たり一緒にしたりしていましたが、やらせてもらうことが決まってから、彼女が歌や手遊びをどんな風に組み立てているのか注意して見るようにしました。そして、「かごめかごめ」や「おおなべこなべ」など、二人やみんなで表現できる簡単なものを取り入れてやってみることにしました。担任でなくボランティアの私が、しかも日本語の歌に合わせて体で表現しているのを最初はただ見ているだけだった子どもも、毎日続けるうちに一緒に体を動かしたり、歌ったりするようになりました。一日のうちのほんの少しの時間でしたが、自分が考えたRing timeを子どもたちと一緒にすることができて心に残る経験となりました。

約四か月間の充実したボランティアを終えて、私は日本に帰ってきました。新しい職場で働きながら、夏から始まるシュタイナー教員養成講座をとる予定です。Bernadetteのような温かい幼稚園を作れる教師を目指します。





保育室のアドベントカレンダーの前で。
左からアシスタントのMarian、
担任のBernadette、
私（稲谷千妃呂）、
もう一人のアシスタントJulia

グアテマラ便り

「トルティーヤ〜!!!」

西原里依

一二歳の娘が目をキラキラさせて叫ぶ。中米のグアテマラに住むようになって早九ヶ月がたちました。和食命だった娘が、いつの間にかこちらの主食であるトルティーヤ（トウモロコシの粉をねり、薄くのばして焼いたもの）とフリホーレス（インゲン豆の煮込み）が大好きに。ぐずぐずしている親を尻目に、子どもの適応していくスピードはすさまじく、スペイン語もぐんぐん覚え、ご近所に韓国人のお友達が多いせいか、韓国語まで飛び出した時には思わず笑ってしまいました。

グアテマラは食べ物がとてもおいしく、「常春の国」と言われるほど一年中温暖で快適な気候です。紫色のジャカランダの花が咲き乱れ、その昔、この国を中心に栄えたといわれる古代マヤ文明の文化がいまだに色濃く残っており、グアテマラ・レインボーと称される色とりどりの民族衣装を着た女性たちが青空の下を闊歩する美しい姿がいたるところで見られます。

一方で貧富の格差が激しく、国民の六割が貧困層という社会問題も抱えています。特に都市部と地方の間には大きな隔たりがあり、その差は治安にも表れています。首都グアテマラ・シティは中米の中でも治安が悪いことで有名で、私たち外国人にとって徒歩で外出することは非常に危険で、誘拐なども多いことから、特に子どもを連れているときなどはいつも緊張していなければなりません。シティから一時間ほど車で遠ざかれば、平気でぶらつけるくらい周りは落ち着いているのですが……。何らかの理由で自由に出歩けないということは、慢性的な運動不足になり、食欲不振になり、睡眠さえも気持ちよくできないという、想像していた以上のストレスを感じます。

グアテマラに着いた当初一番困ったのが娘の遊び場でした。日本のように気軽に公園や広場に行けないので、ショッピングセンターか、ファーストフード店の暗い室内の大型遊具でしか遊ばせることができませんでした。屋外でできるだけ自然に触れられる所をと家を探し、緑が茂る共同スペースがついたコンドミニアムに落ち着くまでは一苦労でした。ご近所にママ友はいません。でもムチャチャ（お手伝いさん）友達がたくさんいます。たいていの子どもが遊びに出るときは、親ではなく彼女たちと一緒にくるからです。一番仲のよい二件隣のムチャチャは十八歳。十歳の時に田舎から一人で出てきて以来、住み込みで働いているそうです。小さい頃、野山で遊びまわったという彼女は遊びがとても上手で、石や葉っぱを使ったおままごと、木の枝でブランコ遊び、「かごめかごめ」グアテマラバージョンなど、夕方になると子どもたちが周りにたくさん集まってきて、まるで保育園のようになります。彼女は十九歳になったらもう一度学校へ行きたいと私に教えてくれました。

毎週日曜日の十時から、レフォルマ通りという大通りが歩行者天国として開放されています。警察が警備にあたり、堂々と道を歩ける唯一の機会を有効利用しようと、ジョギングする人、犬の散歩をする人、子どもに自転車を練習させる人などでいつもごった返しています。歩いていると、乗馬体験コーナーがあったり、ピエロがいたり、いろんな会社のキャンペーンがあったりなど、ちょっとした遊園地みたいで子どもたちは大はしゃぎです。そんな中、道端や広場で授乳しているお母さんたちを見かけます。日本のように下から服をまくってとか、授乳服のスリットからの授乳ではなく、襟ぐりをグイっとさげて片乳すべてを出して授乳するグアテマラスタイル。授乳室？授乳ケープ？そんなのないない……！堂々あっぱれです。しかし日本人男性にしてみれば、グアテマラ人の授乳姿がどうも気恥ずかしいようです。まして歩きながらの授乳中、子どもが口を離しても服を直すこともなく、気にせずに歩いて行ってしまうのには、「どうしてあの人お乳が出てるの?!」とこちらはいちいちびっくりしてしまいます。そんな光景を見ていると、日本ではなんであんなに限られた場所でしか授乳が許されないんだろうと思ってしまいます。出かける前には必ず授乳室をネットで探してから出かける、というお母さんも多く、時間も場所も関係ない赤ちゃんの要求に応えるにはとても不自由な環境です。グアテマラのようにこんなにも授乳が日常のできごととして受け入れられていることがとても羨ましいです。

グアテマラはブラジルと同じくラテンの国なのですが、どちらかというと日本と似ているところも多いと感じます。マヤの女性たちは機織りをするし、彼らの世界観や宗教観はどこか日本人に通じるところがあったり、赤ちゃんには蒙古斑があるそうです。「そうさ、俺たちの先祖はアリューシャン列島をつたってアジアから来たんだよ！」そう言われて思わず納得。今、その機織りを習っています。ピンと張ったたて糸に横糸を通して、トントンと上から整えます。初めてなのになぜか自分に馴染むのは、私にもこの文化に通ずるところがあるからかもしれません。一筋ずつ織りあがっていく様は本当に楽しい！さあ、これからのグアテマラ生活、何色に織りあがっていくのか、楽しみです。

西原里依
二〇〇二年、モンチアズールでボランティア活動（四ヶ月）。その後、中学校の非常勤講師などを経て、二〇〇六年、夫の仕事でサンパウロへ。再びモンチアズールでボランティア活動に携わる（約二年）。日本に戻りCRI活動に関わり、現在はグアテマラ在住。一児の母。

元モンチアズールボランティアは今？

世界は緊急事態！じわじわ効いてるボランティア経験

蓑田竜史（みのだりゅうし）

ブラジルから帰国して大学院の研究室に復帰したとき、現職高校教員として学んでいる方が隣の席からボソっと、「ボランティアとか募金とかやっても、結局、世界の構造が変わらないと一緒なんだよね。」その場では笑みを返しましたが、自分がやってきたことが全否定されたように感じ、内心穏やかでなかったことを思い出します。

しかし、その後、インターネットを中心に世界の出来事、経済、歴史、宗教等、様々な視点でいろんなことを調べて、いろんな可能性や諸説をパズルのように繋ぎあわせると、今まで考えもつかなかったような世界が見えてきました。全て正しいかは別にしても、ずっと社会の不平等に疑問を感じていた私は、なぜ格差や戦争が起きるのか、新たなヒントを得た気がしました。ズバリ言われた「世界の構造」を変えないといけないということがよくわかったのです。

FIFA日韓ワールドカップでブラジルが五回目の優勝（ペンタカンピオン）を果たした二〇〇二年、ほぼ一年間モンチアズールに滞在しました。一九九五年の大学入学でようやくやりたいこと探しが始まり、留学や放浪をしながら教員になることを決意。その動機もこんな世の中でいいのか？というところから出発していたので、できる限り世界を経験して教壇に立ちたいと思っていました。ブラジルで日本語を教えるチャンスを見つけたので飛びつきました。その「だるま塾」での一年間の研修の際、モンチアズールを知ったのです。是非とも行かなきゃいけん！と、一旦、資金稼ぎと休学延長のために日本に帰国し、モンチアズールにやって来ました。

モンチアズールでの経験の後、無事に公立中学校社会科教員になりましたが、ブラジルとの縁もほとんどなくなり、授業の中で経験談を話す程度になってしまいました。せっかく、ブラジル人が多いという理由で親戚もいない静岡県に就職したのに、です。国際理解教育を深めるでもなく、生徒指導に追われる日々が流れていましたが、JICAで現職教員の海外視察を兼ねた、国際理解教育指導者研修なるものに出会い、三年越しで選抜され、バングラデシュに行けることになりました。モンチアズールでの経験が役に立ったのはもちろんのこと、改めて自分に出来ることを考えるようになりました。それからは、世界の現状を子どもたちに伝えるための教材開発に時間をかけるようにもなりました。「世界の構造」を変えるために、まず多くの人がそのことをより詳しく知ることが何よりも大切だと感じたのです。

バングラデシュの「マイクロクレジット」を中学生にも理解できるように、農村で実際にインタビューをした内容を織り交ぜた人生ゲームを作ったりしました。また、静岡県東部地域を中心に市民講座のような形で、貧困や格差の問題をテーマとして国際理解ワークショップを何度かやらせてもらうことができました。その中で、援助を受けるだけでなく住民自らが自立していくことが大切だというモンチアズールの例なども取り上げました。

現在、念願が叶い、第一希望であるブラジルではありませんでしたが、妻の出身国である韓国の釜山で日本人学校に勤務しています。駐在員の子弟が多いため、経済的に恵まれた児童・生徒が多く、また国際感覚は日本の子どもたちよりあるはずなのに、開発途上国の現状になるとあまり知らない子どもが多いのは日本と同じです。しかし、一度知ると、海外で生活している自分たちの立場と客観的に比較しながら、世界の子どもたちの現状に対して興味を強くもっているのは感じます。授業や道徳だけでなく、集会等でも自分が見聞きし、感じたことを出し惜しみせずに子どもたちに伝えています。

モンチアズールにいた時、住民のみんなと「世界社会フォーラム」に参加させてもらいました。植民地時代から独立を果たした南米各国はその後も欧米の搾取から抜け出せていないと感じましたが、今現在も変わりません。アジアでは、民間の交流が進んでいるにも関わらず、国家間のいざこざが毎日のように報道されています。しかし、現実の我々の生活では、一パーセントの支配階層と九十九パーセントの庶民との格差が広がっているのが最大の問題なのです。現在のマスコミは決してそこを焦点にしていません。「世界の構造」は既に日本にも深く入り込んでおり、ますます庶民の生活は苦しくなるのは目に見えています。

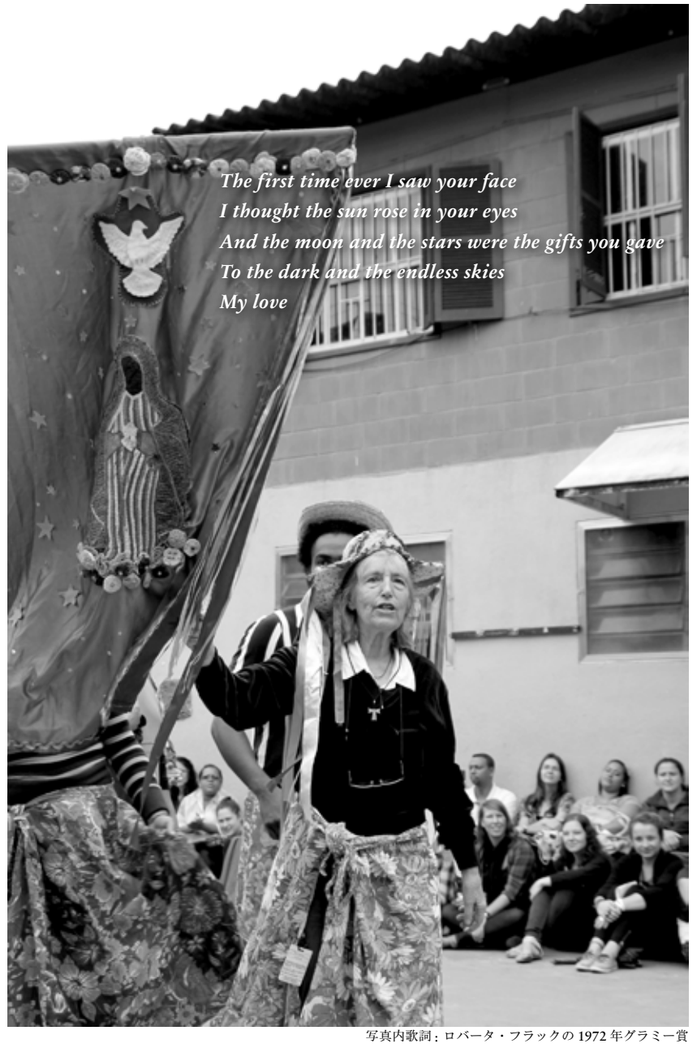
世界中の庶民がいまこそ手を握らないと、「世界の構造」はさらに強固なものとなり、取り返しのつかない世の中になると強く感じています。今、できることは何か、常に考えています。時間はあまりないと思っています。学校で直接伝えられることには限度がありますが、子どもたちが自分で考える力、興味の喚起、メディアリテラシーをつけることはできます。そして、ブラジルで経験したことを常に反芻しながら、ネットを中心にマスコミからは知れない情報を発信することで、「世界の構造」が万人の幸福につながるものへ変わるように試行錯誤している今日この頃です。

蓑田竜史
大学院を二年間休学し、二〇〇二年モンチアズールでボランティア活動（十か月）。その後、静岡県の公立中学校社会科教師となる。二〇一二年より、大韓民国釜山日本人学校赴任。一児の父。

ウテ：ウテ・クレーマーです。シュタイナー学校で教員をしながら、1975 年にこの活動を始めました。私の活動の出発点は、「教育」でした。ところが、活動を始めた当時、子どもたちの生活環境や学び方をみていて、保健衛生面でさまざまな障害があることに気がつきました。子どもたちは学ぶ意欲があるのに、シラミ、赤痢など、さまざまな要因でそうできない状況にあったのです。薬もない。インフラも整っていない。水道の配管さえもありませんでした。**Michael 医師：**当時、この地域は、公共権力から完全に見放されていました。**ウテ：**母親たちとの対話を通して、このファヴェーラにも医者がいてもいいのではないかと、そんな夢を抱くようになりました。この地域には、公衆衛生もなかったのです。そこで、この地域にも医者を呼ぼうと、協力をしてもらえる医者を探しました。私が、シュタイナー学校の教員であったこともあって、アントロポゾフィー（人智学）医学の医師がいいなと思いました。**Michael 医師：**1979 年、私はトビアス・クリニックに勤めていました。ウテ・クレーマーとモンチアズール診療所をつくろうとしている人たちが、ここで共に医療、診療の社会運動を起こしていこうと誘ってくれました。私はすぐに快諾しました。そして当時はまだ木造小屋だった、モンチアズール初のこの診療所で働き始めました。**Michael Yaari 医師（現：診療所コーディネーター）：**モンチアズールの診療所は 1979 年に開設しました。Michael 先生は、差別のない、アントロポゾフィー（人智学）に基づく、誰もが安心して受けられる良質な医療を実践する、という大きな夢を抱いていました。**Michael 医師：**現在の医療には私は道徳的にも、倫理的にも課題があると感じていました。医療現場において、経済的な理由で人々を差別するようなことがあってはならないと思っていました。**ウテ：**それで、診療所を中心にいろいろな人たちが集まるようになりました。その後やってきた看護師のゼッカもいっしょになって、地域の生活環境を自分たちで改善し、より衛生的にするために、"mutirão"（住民たちによる共同奉仕活動）ができないか、水道水が引けないか、電気は引けないかといろいろ模索しました。**Michael Yaari 医師：**90 年代のはじめに、モンチアズールの診療所はわずかな予算を獲得しました。そのときに部屋数も増やし、煉瓦作りの診療所に建替えました。それから、チームのより多くの人が、より多くの時間ここで仕事ができるようになりました。この頃から徐々に私たちの”夢”が現実のものとなっていきました。そしてまた、この頃、診療所の需要は、とても大きなものとなっていました。この診療所の一番の特徴は、すべての人々に同等なそして良質な診療を行っていることです。とてもシンプルな方法で、それぞれが一番必要とする医療を提供しています。社会から排除されがちな貧困地域で、差別なく、誰にでも開かれた良質な医療を提供する。それがこの診療所の特徴です。**字幕：**モンチアズールは、多岐にわたる分野で活動しています。「保健 / 教育 / 格差是正（雇用創出）/ 社会福祉 / 文化 / 環境」すべてのアクション（活動）は、絶対的な目的によって方向付けられています。それは、人間のホリスティック（注）な発展、成長を目指すことです。（注：ホリスティックとは……語源はギリシア語の holos(全体)、派生語には whole(全体)、heal（癒す）、holy(聖なる)、health(健康) など”つながり”の再生をめざす人間形成への試み。すべてを包括する「考え方の枠組」（日本ホリスティック教育協会（編）『持続可能な教育社会をつくる』より））　モンチアズール・コミュニティ協会は現在、モンチアズール、オリゾンチアズール、ベイーニャの３つの地域で、５千世帯に直接的なサポートを行っています。診療所はひと月に、（延べ）1,050 人以上の患者さんを診ています。保育園と教育的な活動を行っている事業では、1,000 人以上の子どもや若者を受け入れています。**ウテ：**今現在、私たちは大変大きな危機に直面しています。医師や保健の面ではなく、それは経済的な危機です。**Michael 医師：**寄付や賛助金が減少の一途にあります。私たちはこの活動を続けていきたいのです。むしろ、発展していきたいと考えています。ここ数年、ベイーニャとオリゾンチアズールにあった２つの診療所は、閉鎖に追い込まれました。今は１つの診療所しかありません。**ウテ：**私たちがこの活動を続けたいのには、いくつも理由があります。当たり前ですが、患者さんがそこにいるからです。ここでは、とてもよく対応ができます。わざわざ遠くから、来る人もいるほどです。ここでは、他では見つけられなかった、健康の面でよりよい暮らしを見つけられますから。**Michael 医師：**診療所が再開できるように、私たちスタッフの願いを聞き遂げて新しく賛助者、寄付者になってくださる方々を募りたいと思います。**ウテ：**私の願いはもちろんこれらの活動が続けられることです。診療所のような場が、現在の弱くてもろい状態を脱し、全体的なアントロポゾフィー運動の発展のために、ブラジルのために、そして全世界のために、ますます良い貢献をしていくこと、それが私の目指すことです。**Eva Castro（地域住民）：**この活動があるがために、私はここが好きだし、この場所に住んでいます。こんな豊かな活動がなければ、今のモンチアズールはなかったと思うし、私は今ここに住んでいなかったと思います。**ウテ：**この 21 世紀という時代は、人類が直面する大きな課題に共に対峙していかなくてはいけません。いまあるこの貧困に目を向けて、少しでもそれらの課題が解消されるように貢献をしなければなりません。Transformar é possível.　**変革は可能です。**

"Associação Comunitária Monte Azul" より
訳 : 宮ヶ迫ナンシー理沙 / 以下 URL より動画をご覧いただけます。

http://vimeo.com/63125985



写真内歌詞 : ロバータ・フラックの 1972 年グラミー賞受賞曲より。当時、ウテさんはまだシュタイナー学校の教師、ブラジルは暗黒の軍事政権時代の只中だった。

ウテ・クレーマー、75歳。

モンチアズール宛の特別募金を希望される方は
[ウテ 75 年] と振り込み用紙にご記入の上、ご入金ください。

読者感想　星重光

＊現在ベリーズにて青年海外協力隊で活躍中の元ベイジョミリーガ代表の星久美子さんのお父さんです。

みなさん、お元気のことと思います。ベリーズの久美が帰国までカウントダウンに入りました。

香村真理子さんの「私の生まれた国」。今まで出会ったことのない、心の「すばらしい」言葉の表現に緊張しました。

植木健太さんの「ドイツでシュタイナー教育者を志す理由」。「本当の教育」を求めて、現代日本の教育現場との隔離からドイツに向かう一つ一つの言葉が心深く刺し込んできました。元教員だった私にも痛いほどわかりました。さあ！やり抜いてください。がんばり抜いてください。いつかお会いできる日を楽しみにしています。

八ページの安藤さんの文、読みました。「脱原発」のデモに通っています。「キンカン」ご存知ですか。金曜日官邸前デモです。三月二十三（土）は「子どもたちを被爆から守ろう！」の新宿デモにも参加予定です。

又、新聞での投書もしています。昨年は東京新聞のミラー（投書）に三月五日、十二月二十五日に載せてもらいました。

近所のあつまりで、震災復興の現実と原発再稼働の現実・憲法改悪などについて話しをさせてもらいました。ただ久美を待っているだけではなく、うんと楽しもうと思っています。みなさんの楽しいご活躍をお祈りします。

CRI ではみなさまからの感想をお待ちしています。詳しくは裏表紙をご参照ください。各記事へのご感想や、次号で取り上げて欲しいトピック等など、何でも大歓迎です。尚、いただいたご感想は許可をいただいた後、紙面に掲載させていただく場合があります。

東海大学国際学科の 2013 年度「愛と性を学ぶ」シリーズへのお誘い

東小雪さん講演会

『多様な「家族」の形　～同性パートナーとの暮らしから見えてくること～』

日時 :　6 月 24 日（月）　17:00 ～ 19:00
場所 :　東海大学湘南キャンパス 13 号館 202 号教室
参加費 :　無料
講師略歴 :　LGBT アクティビスト。元宝塚歌劇団花組あうら真輝。
2013 年 3 月 1 日、パートナーの女性と
東京ディズニーシーにて初の同性結婚式を挙げました。
現在は、テレビ・ラジオ出演、講演活動、コラム執筆、
イベント開催など、積極的に LGBT 情報を発信しています。

東小雪さん

2013/3/1 の結婚式の様子

映画上映会

「うまれる」

日時 :　7 月 25 日（木）　13:30 ～ 15:30
場所 :　東海大学湘南キャンパス（教室未定）
参加費 :　無料
内容紹介 :　監督、豪田トモ。ナレーション、つるの剛士。
子供は親を選んで生まれてくるという胎内記憶をモチーフに、
命を見つめる 4 組の夫婦の物語。
（ぜひ見て頂きたいです。小貫さんも号泣したそうです。）

マルチカルチャー・キャンプ（北海道）～メインテーマ「愛について」

日時 :　8 月 26 日（月）～ 30 日（金）
場所 :　ひびきの村　http://www.hibikinomura.org/
宿泊形式 :　オイリュトミー・ホールでの雑魚寝
食事形式 :　持ち回り食事当番によるクリエイティブ料理
参加費 :　未定（それほど高くない予定）

各イベントお問合せ先：
小貫大輔（bj.daisuke@gmail.com）

CRI 会員の募集

CRI - チルドレンズ･リソース･インターナショナル（「子どもたちのための国際資源」の意）は、参加するメンバーがそれぞれに自分の持つ能力、知識、情報、時間、資金などを「資源」として提供することで、ブラジルと日本の両国で生きる子どもたちの「子ども時代」を守り、支援することを目的とするグループです。
CRI への参加の方法としては、ブラジルや日本での活動に直接参加することの他に、CRI 会員として会の活動を精神的、経済的に応援する仕方があります。CRI の会員になっていただいた方には、活動の最新情報を載せた「くりあんさブラジル通信」（旧「CRI 通信」）を年に 2 回お送りしています。

会費について

CRI では、それぞれが可能なリソース（資源）を持ち寄るという考えから、一定の会費を定めていません。参考としては年に 3,000 ～ 5,000 円振り込んでいただく方が大半です。継続した活動を可能にするために毎月 2,000 円（年間 24,000 円）、5,000 円（年間 60,000 円）と決めて振り込んでくださる方もいます。

会費納入方法

■ 郵便振替

口座番号	00200 - 9 - 62458
加入者名	C.R.I

■ 銀行振込

振込先	みずほ銀行　麹町支店 (021)
口座番号	普通預金 1734036
口座名	シーアールアイ ダイヒョウオヌキダイスケ

＊通信欄に「CRI 会費」とご記入ください。
＊銀行振込の方は、会費納入の際に下記連絡先へメール、ファックス、郵便のいずれかの方法で連絡先をご連絡いただきますようお願いいたします。

連絡先
〒 259-1292
神奈川県平塚市北金目 4-1-1
東海大学国際学科気付
FAX: 0463 - 50 - 2407
e-mail: criinfo@cribrasil.org

情報発信について

CRI ではインターネットも活用して、皆様への情報発信および意見交換を行っていきたいと考えております。下記 2 点をご参照ください。

1. メーリングリストへの加入：
イベント時や公式なお知らせをパソコンメールにて連絡しております。加入希望の方は大変お手数ですが、下記アドレスから “ML に参加” のボタンをクリックし、メンバー登録をお願いします。
http://www.freeml.com/criopen
（メール受信の休止は、上記ページより退会が可能）

2. Facebook ページ：
SNS サイトを活用し、インターネット上に誰でもアクセスできる CRI のページを設けております。ホームページの更新よりも技術的に容易である事・閲覧者も容易に意見表示を行えることなどのメリットから、最近は当該サイトの利用も活発になっております。最新の CRI 情報をご確認いただきたい方は、以下のアドレスにアクセスをお願い致します。
https://www.facebook.com/cri.monteazul
（アカウントを作成しなくとも、自由にアクセス可能）

皆様からのご意見・ご感想を募集します !!

CRI では皆様からの通信に対するご意見を募集しております。今後のより良い運営の為にも、率直なご意見をお聞かせください。

1. お手紙：左記の住所までご郵送願います。
2. メール：以下のアドレスにメール送信をお願いします。
cristaff@cribrasil.org
（題名に『通信第〇号・感想』とご記載ください）
3. Facebook ページへの書き込み：前述のサイト上にご意見募集の書き込みを作成しておりますので、続けてコメントを記載下さい。
（書き込みを行う場合は無料アカウントの作成が必要）